した尼さんとは見えません。頭巾を被つてゐた頬のあたりへ鬢の毛のほつれが見えます。永い尼寺生活をした寂しい人ではなく、まだ色香のこぼれるやうな美しい人でありました。

その姿を見ると池のほとりの尼は手を振つて何か合圖をすると、折角開きかけた障子を閉めて再び姿を現はすことをしませんでした。

この美しい尼ならぬ尼は駒井能登守の寵者のお君の方であります。

お君は、惠林寺へ寄進の長持と見せて其の中へ入れられて此處まで送り届けられたものであります。然も其の送り届けられた後まで、お君は其の事を知りませんでした。

お君は、あの晩に、お松の口から思ひ切つた忠告を聞いて、お松が歸つたあとで咽喉を突いて自殺しやうとしました。

それは老女の手によつて止められましたけれど、その後のお君は、氣が狂うたと思はれるばかりでありました。

その物狂はしさが靜まつた時分に、お君は死んでゐました。自殺したのではなく、誰かの手で死なされてゐました。誰かの手、それは恐らく駒井能登守の手でありませう。能登守は、老女に言ひつけて物狂はしいお君の息の根を止めさせたものと思はれます。何かの藥を與へて、それによつてお君は殺されてゐました。

お君が再び我に歸つたのは此の尼寺へ着いた後の事で、自分は寄進物の長持の中へ入れられて、此處に送られたといふ事も其の後に庵主から聞かされました。

慢心和尚が宇津木兵馬を呼んで、

『お前さんに一つ頼みがある』

兵馬は一旦此の坊主から腹を立てさせられましたが、今になつて見ると腹も立てないのが此の坊主です。何の頼みかと思つて聞いてゐると、

『向嶽寺の尼寺から、八幡村の江曾原まで人を送つて貰ひたい』

といふ事です。なほ其の人といふのは何者であるかを兵馬に尋ねられない先に和尚が語つて聞かせる處によると、

『向嶽寺の燈外庵へ此の頃泊つた若い婦人がある、燈外庵の庵主は其の若い婦人を預かるには預かつたけれども始末に困つてゐる——尼寺といふ處は、罪を犯した女でも、一旦其處へ身を投じた以上は誰も指をさす事は出來ないのだが、その尼寺で持て餘してゐる女といふのは……實は、お前さんだから話すが身重になつてゐる——』

といふ事であります。和尚は眞面目でありました。

『それじやによつて、尼寺でも始末に困る、あの寺でお産をさせるわけには行かない。よつて何處ぞへ預ける處はないかと、わしが處へ相談に來た、そこで、わしが思ひ當つた事は、此の八幡村の江曾原に小泉といふ家がある、そこへ其の女を連れて行つて預けるのだが……』

と云はれて兵馬は奇異なる思ひをしました。八幡村の小泉は、もとの自分の緣家である。こゝへ來る時も思出のかゝつた家である。今その家の名を此の和尚の口から聞き、而も身重の女を守護して其の家を訪ねよと請はるゝ事は、兵馬に取つて奇異なる思ひをせずには居られないのであります。

『小泉の主人が、いつぞや、わしの處へ來て和尚樣、惡い女の爲に戒名を一つ附けてやつて下さいといふから、わしは、よし〳〵惡い

女ならば惡女大姉とつけてやらうと云ふたら、有難うございます、そんなら惡女大姉とつけていたゞきますと云つて歸つた、その惡女大姉の家へ、また惡女を一人送り込むといふのも因緣じや、此の役は他の者ではつとまらぬ、お前さんで無くてはつとまらぬ』

兵馬は、いよ〳〵奇異なる思ひをして兎角の返事に迷ひましたけれど、思ひ切つて承知をしました。

『宜しうございます、たしかにお引受け致します』

『有難い、では、夜分になつて、八幡までは其んなに遠くもない處だから、宵の口に行つて戻るが宜い、併し、聞く處によると其の女は中々曰くつきの女で、おまけに別嬪さんださうだから、甲府あたりから狼が二三匹ついてゐるといふことだから、その邊はお前さんもよく氣をつけてな』

と念を押しました。

兵馬が委細を承つて、やはり例の僧形で惠林寺から向嶽寺へ向つて行つたのは、其の日の宵の口でありました。

間もなく一挺の駕籠が向嶽寺から出て、僧形の宇津木兵馬は其の駕籠に附添うて寺の門を出て行くのを見ました。

宇津木兵馬は其の駕籠を守つて差出の磯にさしかゝりました。

こゝへ來た時分には月が皎々と上つてゐました。

差出の磯の龜甲橋といふのは可なりに長い橋であります。下を流れるのは笛吹川であります。行手には龜甲岩が高く聳えて、その下は松原續きであります。

成程、耳を澄ますと何處かで千鳥が鳴くやうな心持がします。龜甲橋へ渡りかゝつた時に、

『右や左のお旦那様』
兵馬は其の聲を聞き流しにしました。駕籠屋も無論そんな者には取り合はないで行くと、
『右や左のお旦那様』
また一人、菰をかぶつて橋の欄干の下から物哀れな聲を出しました。
兵馬も駕籠舁も其んな者には、いよ〳〵取り合はないでゐるうちに又しても、
『右や左のお旦那様』
橋の兩側に菰をかぶつたのが幾人もゐて、通りかゝる兵馬の一行を見て頻に物哀れな聲を出す。
『申し、たよりの無い者でござりまする、申し、申し』
菰を刎ね退けて一人が駕籠の前へ立ちふさがつた體は尋常とは見られ

ません。
兵馬は、手に突いてゐた金剛杖を、ズッと立ち塞がる怪しいお菰の前へ突き出しました。
それが合圖となつたのか、今まで前後に菰を彼つてゐたのが一時に刎ね起きました。
『何をする』
兵馬は其の金剛杖を振り上げました。
『其の駕籠を此方へ渡せ』
菰を刎ねのけたのを見れば、それは乞食體の者ではありません。それ〴〵用心して來たらしい仲間體のものでありました。
委細を知らない兵馬は、和尚が自分を撰んで附けたのは此んな場合の事であるなと思つたから、

『エイ』
と云つて金剛杖で先に進んだ一人を苦もなく打ち倒しました。
『この坊主』
兵馬の手並を知つてか知らないでか、怪しの惡者はバラ〳〵と組みついて來ました。
『エイ、無禮な奴』
兵馬は身を換はして組みついて來るのを、發矢々々と左右へ打ち倒しました。それは兵馬の働きとして敢て苦しいことではありませんでした。彼等を打つことは大地を打つのと同じことに、それを換はすのは繩飛の遊びをするのと大して變つた事はありません。
驚いて逃げ足をした駕籠舁も兵馬の手並に心強く息杖を振つて加勢する位になつたから、惡者共は命辛々逃げ出し、或は橋の下の河原へ落ちて這々の體で逃げ散つてしまひました。

それから兵馬は駕籠の先に立つて行手の方をうかゞうと、その時分に向ふから、また橋を渡つて來る人影のあることを認めました。
駕籠屋を勵して長蛇のやうな龜甲橋を渡り切らうとすると、左は高い岩で右は松原から差出の磯の河原につづくのであります。月は中空に圓く澄んでゐました。向うから歩いて來るのは僅に一箇だけの人影であります。
『少々……物をお尋ね申たいが』
笠を深く彼つて兩刀を差して、袴を着けて足を固めたまだ若い侍體の人、恐らく兵馬より若からうと思はれるほどの形でもあり、姿でもあり、また其の聲は女かと思はれるほどに優しい響きを持つて居りました。

『はい』
兵馬は立ち留まりました。駕籠は心持足を緩めたゞけで進んで行きました。
『あの、七里村の惠林寺と申すのは何れでございませうな』
『惠林寺は、これを眞直に進んで行き、鹽山驛へ出で、再び尋ねて見られるが宜い、大きな寺故、直に知れ申す』
『それは忝なうござる』
若い侍は一禮して通り過ぎました。兵馬は其の聲が何となく覺えのあるやうな聲だと耳に留まつたけれど、自分は近頃あの年ばえの友達を持つた覺えがありません。
『雲水樣』
駕籠屋が兵馬を呼びかけました。

『何だ』
『今のあの旅の若いお侍は、ありや何だとお思ひなさる』
『何でもない、やはり旅の若い侍』
『處が違ひますね』
『何が違う』
『何が違うと云つたつて雲水樣、こちと等は商賣柄でございますから其の足ごりを一目見れば見當が着くんでございます』
『うむ、何と見當をつけた』
『左樣でございますねえ、ありや女でございますぜ、雲水樣』
『女だ』
『左樣でございますよ、男の姿をしてゐるけれども、あの足つきはありや男じやあございません、たしかに女が男の姿をして逃げ出し

たものでございますねえ』

『成程』

『當人はすつかり化たつもりでも、見る奴が見れば一眼で其れと見破られちまうんでござんす、これから大方、江戸表へでも落ちやうと云ふんでございませうが、道中筋で飛んでも無え目に會はされるのは鏡にかけて見るやうだ』

『成程』

兵馬は、さすがに駕籠屋が商賣柄で、物を見ることの早いのに感心をし、さう云はれて見ると言葉の端々にも、男とは思はれないやうなものがあることを思ひ出して、長蛇のやうな龜甲橋を振返つて其の後姿を見送りました。

兵馬は其の後ろ姿を見送つて異樣な心を起しました。

橋を渡り終つて松原へかゝると、駕籠屋はまた不意に悸つとしました。

松林の中で焚火をしてゐる者があります。焚火の炎が見えない程に幾人かの人が焚火の周圍に群がつてゐて、其れが今まで一言も物を云はなかつたといふのは、正しく人を待ち構へてゐるものと見なさなければなりません。それですから駕籠屋はギョッとして立ち竦みました。

併し、宇津木兵馬は其の事あるのを前から感づいてゐました。

『構はず、ズン〳〵遣つて呉れ』

と駕籠屋を促しました。

『おい、その駕籠待つて呉れ』

果して焚火の周圍から聲がかゝります。

『構はずやれ』
兵馬は小さな聲で又も駕籠屋を促しました。
『おい、待たねえか』
『何用じゃ』
『其の駕籠の主は何の誰がか名乗つて通つて貰ひてえ』
『無禮千萬、其方達に名乗るべき筋はない』
『其方で名乗るが忌なら此方から名乗つて聞かせやうか、その駕籠の中身は女であらう』
『女で有らうと男であらうと其方共の知つた事ではない、駕籠屋、早くやれ』
『おつと、おつと、只は通さねえ、外でも無えが、其の女を此方へ温和しく歸して貰はなければ、お前達に些と痛い目を見せるんだ、

向嶽寺の尼寺から送り出して行く先は何處だか知らねへが、此處へかゝると網を張つて、附いて來た坊主の手並がドノ位のものやら。最前向ふの橋の袂で一寸小手調べをやらせたが、あれが此方の本藝だと思ふと大間違、さあ〳〵痛い目をしないうちに、早く渡したり〳〵』
『憎い奴等』
兵馬は金剛杖を握り締めると、彼等はバラ〳〵と焚火の傍から走り出して兵馬を取り圍みました。
兵馬は金剛杖を揮つて駕籠を目がけて來る曲者を發矢と打ち、つゞいてかゝる惡者の眉間を突いて突き倒し、返す金剛杖で縱横に打ち拂ひました。
この惡者共は慥かこのあたりに住む博徒の群か、或は渡り仲間の質

のよくない者共と思はれます。

兵馬は、やはりそれ等を相手にする事に、さして苦しみはありませんでした。片手に打ち振る金剛杖で思ふまゝに彼等を打ち倒し、突き倒すことは寧ろ面白いほどであまりした。

けれども、本文通り……敵は大勢であつて、これをいつまでも相手に爭うてゐることは兵馬の本意ではありません。兵馬は彼等を相手にしてゐるうちに駕籠だけは前へ進ませやうとしました。惡者共は兵馬よりは駕籠を目ざしてゐる者と見えました。駕籠を守る兵馬は一人、それをやらじとする惡者は松林の中から續々と湧いて來るやうであります。

併し、多勢も亦兵馬の敵ではなく、その神變不思議な一本の金剛杖で支へられて、近寄る事が出來ないで離れて頻りに噪いでゐました。兵馬とても彼等を近寄らせない事は何の雜作もないけれど、さりとて、遠卷のやゝになつてゐる處を、何處へ如何斬り拔けて宜いのだか、その見當はついてゐないのであります。駕籠屋は駕籠を擔いだまゝで、ウロ〳〵するばかり、逃げ出す勇氣もありません。

『やい、確かりやれ、敵は、たつた一人の痩坊主だ』

親方らしいのが、棒を揮つて飛び出すと其れに勵まされて丸くなつた五六人が兵馬を目蒐けて突貫して來ました。

兵馬はよく見澄まして例の金剛杖で、バタ〳〵と左右へ打ち倒す時に、不意に松葉の中から風を切つて一筋の矢が兵馬へ向いて飛んで來ました。

危ない事。併し、兵馬の金剛杖は其の思ひがけない一筋の矢を、一髮の間に打ち落すことが出來ました。

『この坊主は拙者が引き受けるから、早く駕籠を片づけろ』

同じく松林の中から覆面した袴の二人の姿が現はれました。これは今までのと違つて兩刀、それに袴、當しく武士の端くれであります。

それと同時に、

『それ擔げ、わつしよ〳〵』

無賴者の一隊は、早くも駕籠を奪つて其のまゝに神輿を擔ぐやうに大勢して舁ぎ上げたやうです。兵馬がハッとする時に左の覆面が切り込みました。

兵馬は金剛杖で其れを横に拂ひました。その瞬間に右の覆面が斬り込んで來ました。兵馬は後に飛び退いて小手を拂ひました。

兵馬に小手を打たれて其の覆面は太刀を取り落した其の隙に、兵馬は飛び越えて駕籠を奪ひ返すべく走せ出すと、續いて二人の覆面は

やらじと追ひかけます。

兵馬は金剛杖を打ち振り〳〵後の敵に備へながら、只走りに駕籠を追ひかけると、彼方の松原でワーッといふ人聲であります。駕籠も人も見えないで、其の人聲が一際高く揚がりました。兵馬は氣が氣ではありません。

飛んで來て見ると、橋の袂の處で、今、一場の大搭闘が開かれてゐる處であります。月が明るいから此方から、繪のやうに其の光景を見て取ることが出來ます。それは今奪つて行つた駕籠を眞中にしてそれを奪つて行つた惡者共が、入り亂れて組合つてゐるのでありました。

然もこの惡者共が相手にしてゐるのは、たつた一人の人間に過ぎないやうであります。一人の人間を相手にして寄つて集つて組んづほ

づれつしてゐるらしいが、其の一人の人間が非常に豪傑であるらしい。

その一人の豪傑は、遠目で見た處では何等の武器を持つてゐないらしい、徒手空拳で、つまり拳を振り廻して、片つぱしから惡者共を撲り散らしてゐるものらしいのです。兵馬は天の助けと喜びました。偶然、通りかゝつた旅の豪傑が、惡者共の狼藉を見咎めて、其れを遮つて呉れたものだらうと喜び勇んで飛んで來て見ると、その豪傑の強い事、遠くで見た通り、拳を固めて惡者共の頭をポカリ〳〵と撲つてゐるのであります。

一つ撲られた其の痛さが餘程徹へると見えて、飛びついて來たり組みついて來たりする奴等が、一つ撲られると二三間も向ふへケシ飛ばされて起き上れない有樣であります。

兵馬は其の勇力にも驚きましたけれども、同時に、それが自分と同じことに僧形をしてゐる人物であると見て、尙ほ不思議に思ひながら、近づいて見ると意外、それは頭と顏の圓いので見紛うべくもあらぬ師家の慢心和尙であらうとは。

『老和尙』

と云つて兵馬は近づいて呼びました。

『宇津木どん』

慢心和尙は其の時、惡者共を片つぱしから撲りつけてしまつて、駕籠の前に立つて拔からぬ面で兵馬を待つてゐました。

『如何して此處へ』

『お前さんに賴みは賴んだが、あぶないと思ふから、あとを跟けて來たのさ、跟いて來て見ると此の始末さ、オホ、』

『すんでの事に、此の駕籠を奪はれる處でした』

『危ない處、オホ、』

和尚は例の愛嬌のある笑ひ方をしました。此の和尚の面の圓い事と口の大きい事と、その口の中へ拳が出入するといふ事は可なり驚かされてゐたけれど、その拳の力が此れほど強からうとは今まで知らなかつた事であり、聞きもしなかつた事であります。何とも見當のつかない使者の役目を吩咐て置いて、あとからノコ〳〵と跟いて來るといふ擧動も、何だか人を見縊つたやうでもあります。

『それまた危ない』

この時疾風のやうに、白刃が兵馬の頭上に飛んで來ました。それは前の覆面の二人のさむらひ。

兵馬が身を躱はすと、慢心和尚は、うどん切りをするやうに、ポン〳〵と二人を續けさまに龜甲橋の上から笛吹川へ落つことしてしまひました。

『オホ、』

實に要領を得ない坊主であります。兵馬は舌を捲くばかりでありました。慢心和尚は、

『さあ、兵馬さん、これからだ、八幡村へ持つて行けと云つたのは大方こんな事が起るだらうと思つたから、奴等を出し抜いたのだね、斯うして毒を抜いて置けば、あとの心配が無い、これから外の方へ持つて行くのだ、さあ可いかヱ、兵馬さん、わしの後へ跟いてお出で』

何をするかと思つて見てゐる間に、慢心和尚は、駕籠の棒へ手をかけて、それをグーッと一方を詰めて一方を長くしました。

『これ女人衆や、少しの間、窮窟でもあらうがの、斯ういふ塲合だから是非もない事じやて、しつかりブラ下がつておゐでよ』

と云つて慢心和尚は、その棒の長くした方へ肩を入れてウンと擔いでしまひました。

いくら女一人の身ではあるといへ、それで片棒で一人で擔いでしまうには可なりの力が無ければ出來ない事であります。兵馬は、やはり呆氣に取られてゐると、和尚は、兩掛の荷物でもブラ下げた氣取で、先に立つてサッサと歩き出しました。

然も其の歩き出す方向が、今まで來た八幡村へ行く方向とは丸つきり違つて、東の方――又しても龜甲橋を渡り直して、元來た方へ歸つて行くのであります。初めは常の足どりで歩いてゐたのが漸く早足になりはじめました。

兵馬は後れじと和尚について走りました。あまりの事に、兵馬は和尚が何處へ行かうとするのだか尋ねる氣にもなりませんでした。併し乍ら和尚は惠林寺へ歸るのでもなし、また尼寺へ立ち戻らうとするのでもないらしく、甲州街道を如何やら勝沼の方まで出かけやうとするらしいから、兵馬は怠へきれないで、

『老和尚、一體、何處へお出でなさるつもり』

と尋ねました。

『甲斐國石和川まで』

『石和川といふのは』

『この川が石和川ぢや』

『其の石和川へ何しに』

兵馬は、いよ／＼解せない事に思ひました。

『此の呑中にある女を其處へつれて行つて沈めにかけるのじや』

『沈めにかけるとは』

『水の中へブク〳〵と沈めて殺してしまうのだ、オホ、』

『エッ』

何と下らない事を云ふ坊主ではありませんか。兵馬が驚くのも無理はありません。それを坊主は平氣でオホ、と笑ひ、

『何も驚くことは無い、昔から例のある事じや、この石和川で禁斷の殺生した爲に、生きながら沈めにかけられた鵜飼の話が謠の中にもあるわい、殺生も惡いけれど邪淫も善くない、女といふ奴、十惡と五障の身を持ちながら、あたら男を迷はして無間の魔道へ引張込む、その罪は禁斷の場所で鵜を使つて雜魚を捕つたどころの罪ではない、一人の女を生かして置くと此の後、好い男が幾人餌物になるか知れたものではない、それ故に、女と見たら取捉まへて沈めにかけて置くのが宜しい、お前さんに手傳つてもらつて此の女を沈めにかけやうといふのは其れだ、なまじいの慈悲心を出して命乞などをしなさんなよ、オホ、』

『老和尚、又しても冗戯を』

『冗戯ではないよ』

冗戯にしても兵馬は、いゝ氣持がしませんでした。況てや駕籠に乗つてゐる女の人が、それを聞いて、いゝ氣持はしますまい。

九

けれども此の和尚が、此の駕籠に乗つてゐる女を沈めにかける目的

でないといふ事は、川の方向は疾うに通り越してしまつて、それとは違つた勝沼の町の方へサッサと歩いて行くことでわかります。兵馬は、いよ〳〵呆れ返つてしまひました。其の大力と洒落々々とした處は、どう見ても人間界の代物とは思はれないのであります。呆れ返りながら兵馬は金剛杖を突き鳴らして和尚のあとをついて行くうちに、ふと思ひ當つたことがありました。

あゝ、この和尚こそ當に其の人ではないかと思ひました。その人に違ひないと思ひました。

その頃、知られた大力の坊主に物外和尚といふのがありました。この和尚は拳骨の名人でありました。拳を固めて物を打てば、其の物が皆凹むから一名を拳骨和尚とつけられました。

此の拳骨和尚がまだ若い時分に越前の永平寺に安居してゐました。その時に或夜和尚は、いたづらをしました。そのいたづらは鐘楼から釣鐘を卸して、其れを山門の外へ持つて行つて打捨つたのであります。翌る朝になつて寺の坊さん達が驚きました。誰が此んな、いづたらをしたか知らないけれども、兎に角、元の通りに鐘楼へ持つて行つてかけねばならぬと、大勢して騒いでゐると、何食はぬ面をして其處へ現れた拳骨和尚は、

『僅か一つの鐘を、そんなに大勢して騒いでも仕方が無いではないか』

と云つてカラ〳〵と笑ひました。

『僅か一つと云うけれど、その一つが釣鐘だ、笑つてゐないで何とか智慧があつたら智慧を貸せ』

『それはお安い御用よ、おれに茶飯を振舞さへすれば、一人で片附

けてやる』

此の和尚の力のある事は坊さん達が皆んな聞いてゐたから、兎も角茶飯を食はせて見せやうではないかといふ事になつて、充分に茶飯を振舞うと、和尚は輕々と其の鐘を差上げて、元の通り鐘樓の上へ持つて來てかけてしまつた。

その後、度々、この釣鐘が山門の外まで動き出すので、

『さては、あの物外奴が茶飯を食いたいばかりに惡戯をする』

一山の者が大笑ひをしました。

この拳骨和尚が京都へ出た時分に、壬生の新撰組を訪ねて近藤勇を驚かした話は其の頃有名な話であります。

或時、壬生の新撰組の屯の前へ、見すぼらしい坊主が、一蓋の檜木笠を被つて、手に鐵如意を携へてやつて來て、新撰組の浪士達が武

術を練つてゐる道場を武者窓から覗いてゐました。

出家とは云ひながら餘り無遠慮な覗き方であつたから、忽ち浪士達に咎められてしまひました。

『我々の劍術を覗いて見る位では、定めて其の心得があるのであらう、兎に角、道場の中へ入つて一太刀合せて見ろ』

強いて和尚を道場の中へ引張り込んでしまひました。

元より名代の壬生浪人の事ですから、面白半分に此の坊主をいたしめて呉れやうと、我勝に得物を取つて立ち向うのを、拳骨和尚は噪げる色もなく、携へた鐵如意を振つて瞬く間に數十人を叩き伏せてしまつた。

この時上座にゐたのが隊長の近藤勇でありました。この體を見て、

『これは〳〵、驚き入つた和尚の腕前、拙者は近藤勇、いざお相手

を仕る』

二間柄の槍を執つて近藤勇が道場の眞中に立ち出でるといふ事になりました。

それを聞くと拳骨和尚は平伏して、

『これは〳〵、先生が名に負う近藤勇殿でござつたか、鬼神と鳴りひゞく近藤先生のお名前、世捨人の山僧までも承り奉る、いかで先生のお相手がつとまるべき、許させ給へ』

と殊勝な御辭退ぶりです。

併し、近藤勇ともあるべきものが、それで承知すべき筈がなく、今は辭するに由なくて、和尚は、また前の鐵如意を取つて立ち上がるといふ段取になりました。その時に近藤が、

『凡そ武術の勝負には、それ〴〵の器がある、貴僧もその如意を捨てゝ、竹刀にあれ木刀にあれ、好む處を持つて立たるゝが宜しからう』

と云はれて、和尚は首を振り、

『我は僧侶の身であるから、あながちに武器を取りたいとも思ひ申さぬ、やはり此れでお相手を仕りたい』

鐵如意を離さなかつたけれど、近藤勇は頑として聞かなかつた。是非、他の獲物を取れと勸めたから和尚は、

『然らば』

と云つて鐵如意を下へ置いて、改めて頭陀袋へ手を入れて何を取り出すかと思へば、木のお椀を二つ取り出しました。その二つの椀を左右の手に持つて立ち上り、

『如意でお惡ければ、この品でお相手を致すでござらう』

餘りといへば人を馬鹿にした仕業である。相手もあらうに、今は京都で泣く子も默る近藤勇を相手に取るに、木の椀を以てするとは何事であらう。勇は烈火の如く怒つて一突に突倒して呉やうと槍を構へましたが、和尚は二つの椀を左右の手に持つて、

『いざ〳〵、いづれよりとも突きたまへ』

といつて椀をかざしてゐる體は傍若無人を極めたものであります。併し乍ら、近藤勇ほどのものが遂に此の傍若無人な坊主を突き倒す隙を見出す事が出來ませんでした。半時ばかりの間、瞬きもせずに睨んでゐたが、やがて如何なる隙を見出しけん、巌も通れと突き出す槍先、和尚の胸板を微塵に碎いたと思ひきや、和尚が輕く身を開いて兩の手に持つた椀を合せて槍の蛭卷をグッと挾んでしまひましたり。仕損じたりと近藤が其の槍を外さうとしたけれど遲かつた。突いても引いても押しても捻つても動かばこそ、汗は瀧のやうに流れ出した。槍を挾まれた近藤は、空しく金剛力を絞り盡すことまた半時あまり、その時に拳骨和尚が大喝一聲と諸共に椀を放すと、さしもの近藤が後に尻餅つき、槍は疊三四枚ほどの距離を彼方へ飛んだ。勇は、餘りの事に呆れ果てたけれども、彼も亦豪傑であつた。恭しく禮を正して和尚に尋ねた。

『まことに萬人に優れた御腕前、感服の至りでござる、抑貴僧はいづれの御方に候や名乗らせ給へ』

『お尋ねを蒙るほどの者には候はず、愚僧は備後尾道の物外と申す雲水の身にて候』

と聞いて、近藤はじめ、さては聞き及ぶ拳骨和尚とは此の人かと、懇に、もてなしたといふ事であります。

嘘か、まことか、此の話は今に至るまで可なりに有名な話でありました。

宇津木兵馬は、その和尚の事を思ひ出したから、若しや右の拳骨和尚が慢心和尚と變名して此の地に逗留してゐるのではないかとさへ思ひました。さうでなければ、こんな勇力ある坊主が二人とあるべき筈のものでは無からうと思ひました。

それで兵馬は慢心和尚に向つて、

『老和尚は若しや、備後尾道の物外和尚ではござりませぬか』

と尋ねました。

『其んな者では無い、其んな者は知らん』

と云ひながら慢心和尚は駕籠を擔いでサッサと行くのであります。

それですから、一度はそれと尋ねて見たけれど、二の句は次げません。斯うして金剛杖を突いて、やつぱり後を追かけて行くうちに勝沼の町へ入りました。

その時分、もう夜は更けきつてゐたのであります。勝沼へ來て柏尾坂の上で和尚が、はじめて駕籠を肩から卸ろして土の上に置き、其の駕籠の上に頬杖をつきながら、

『宇津木さん、これから先は此の中の人をお前さんに引き渡しますよ、如何かして江戸へ伴れて行つて上げるのが一番宜からうと思ひますよ、此の中の人には向嶽寺の方から手形が出てゐるし、お前さんは、わしの寺からといふ事にしてあるから道中も無事に江戸へ行けるだらうが、出家姿で、女を連れて歩くといふのも異なものだから、あたり前の武士の風をして行くが宜からう、この町で富永屋庄右衛門といふのを、わしは知つてゐるから其れを起して今晩は泊め

てもらひ、そこで兩人共支度をとゝのへて、明朝にも江戸へ出かける事にしてもらひたいね、その行先は兩人で相談して見るがよい、さうして兵馬さんの方は御用が濟んだら、また此方へ歸つて來て、敵討といふ奴をおやんなすつたら宜からう』

斯う云ひましたから、兵馬は、やつぱり呆氣に取られてゐると、

『さあ、さういふ事にして、これから富永屋を叩き起さう、宿屋が商賣だから、いつ何時でも叩き起して、いやな面をする筈はない、殊に惠林寺の慢心が來たといへば、庄右衛門は喜んで出迎へる』

兎に角、斯うして駕籠は勝沼の町の富永屋庄右衛門といふ宿屋の前へ來て再び土の上へ置かれました。

慢心和尙は其の宿屋の前へ立つて、拳を上げてトン〳〵と戸を叩きましたけれど起きまのせんでした。大抵の場合には、時刻を過ぎては狸寢入をして、知つてゐても起きない事があるのでしたから、慢心和尙は、やゝ荒く戸を叩いて、

『富永屋、富永屋……庄右衛門、庄右衛門、惠林寺の慢心だよ、慢心が出て來たのだよ、起きさつしやい』

斯ういふと慢心の利目が即座に現はれて、家中が急に混雜をはじめました。

慢心和尙は此處の家へ二人を送り込んでから、スーッと歸つてしまひました。

駕籠の中の主が、お君であつたといふことを兵馬は此の宿屋の一室へ來て、はじめて知りました。

お君は其の前から感づいてゐたけれど、口に出して云ふことは出來ませんでした。兵馬に取つては意外千萬の事です。殊に神尾主膳の

爲に駒井能登守が陷れられた一條を聞いて、兵馬は氣の毒と腹立とに堪ゆる事が出來ません。

また其の後のお松の身の上を聞いて見ると、やはり危險が刻々と迫つてゐて、今日は逃げ出さうか、明日は忍び出さうかと、其の事のみ考へてゐるといふことを聞いて、それも心配に堪へられませんでした。

けれども、さし當つての問題は預けられた此の女を如何するかといふことであります。執念深い神尾主膳の一味は此の女を生捕つて、また何か恥辱を與へんとするものらしい。さすがに尼寺は荒せなかつたけれど、一歩踏み出すとあの始末です。

甚だ迷惑千萬ながら、兵馬としては、やはり此の駕籠を江戸まで送り屆けて兎も角もしなければならない成行になつてしまひました。

お君は、もう弱り切つてゐました。兵馬はお君を先に休ませて、明日の駕籠や乘物の事を心配しました。明朝と云つても、もう間もないのだから、今から如何しやうといふ手筈もつかないのであります。

且又、弱り切つたお君の姿を見ると、この上駕籠に搖られて險しい山越をさせる事は考へものであります。

そこで兵馬は、明日一日は此處に逗留して隱れてゐやうと思ひました。その間に準備をとゝのへ、お君にも休息の暇を與へて、明後日の早朝に出立しやうと考へたのであります。

駕籠の中には兵馬の衣服大小の類も、路用の金も入れてありましたから、兵馬は其れを取り出して調べました。

江戸へ送り屆けて後の此の女の處分も考へれば、丸で雲を掴むやうなものです。まさかに能登守の本邸へ送り屆けるわけには行くまい

し、さりとて、江戸は此の女の故郷ではない。江戸へ連れ出して見ての問題だが、兎も角、江戸へ連れ出しさへすれば如何にかなるだらうと思ひました。

さうして、此の女を江戸へ届けて、兎も角も落着けて見てからの兵馬自身の行動は、直ちにまた此の甲州へ舞ひ戻つて來る事であります。最も怪むべきは神尾主膳である。駒井能登守を陥れた手段の如きは聞いてさへ其の陰險卑劣な事に腹が立つ、わが狙う仇も、慥にあの神尾が行方を知つてゐるものゝやうに思はれてならぬ。斯うなつて見ると、今は神尾を中心として當つて見ることが最上である。場合によつては、あの邸へ斬り込んで……とまで兵馬は決心しました。

疲れ切つたお君は傍らにスヤ〳〵と寝てゐるけれど、兵馬は寝もやらずに考へてゐます。

十

其の翌日は、あまり大降ではないけれども、兎に角雨が降りました。宇津木兵馬に取つては此の雨が却て仕合せな位でありました。兵馬はお君を此處で出來るだけ休養させやうとしました。

お君は病人のやうで、兵馬は其の看護をしてゐるものゝやうにして旅の用意を調へつゝ、其の日一日を暮らしました。

丁度此の時に、此の富永屋といふ宿屋に一人の年増の女が逗留してゐました。

この間、絹商人だといふ亭主らしい人と一緒に來て、その亭主らし

い人は何處へか出て行つて、まだ歸つて來ない間を其の年增の女がたつた一人で幾日も待つてゐるのであります。

けれども、其の亭主らしいのが幾日も歸つては來ないうちに、帳場へ懇意になり、主人の庄右衛門とも心安くなりました。

さうしてゐるうちに番頭が病氣になると、この女が帳場へ座り込みました。帳場へ座り込んだと云つた處で、主人を籠絡したり、番頭を押しのけて座り込んだわけではなく、自分の暇つぶしに、懇意づくで手助けをしてやるやうな調子で働いてやつてゐました。

處が此の女は、人を遣うことが上手、客を扱うことに慣れきつてゐました。その技倆から云へば前の番頭などは比較になるものではありません。この位の宿屋を三ッ四ッ預けたとて、物の數とも思はない位の冴えた腕を持つてゐるやうに見えましたから、主人は舌を捲いてゐました。雇人達は喜んで其れに使はれるやうになりました。

それに、番頭の病氣が捗々しくなくて湯治に出かけるといふほどであつたから、そのあとを主人も頼むやうにし、當人も退屈まぎれの氣になつて、この女が、今では、ほとんど此の店を預かつてゐるのであります。この女といふのは、別人ではなく――兩國で女輕業の親方をしてゐたお角であります。

その雨の降る日に、お角は帳場に坐つてゐました。

『お千代さん、それでは三番のお客樣も、今日は御逗留なのだね』と云つて、お千代といふ女中に尋ねました。

『はい、今朝は早くと仰有つておゐでゞございましたが、お足が痛いからと仰有つて、もう一日お泊りなさるさうでございます』

『そりや左樣でせう、あのお御足では……あまり旅にお慣れなさら

ないお方のやうですね』

『ほんとに女のやうなお若いお美しいお侍でゐらつしやるのに、お足を、あんなにお痛めなすつては、お可哀相でございます』

『お見舞に上つて見ませう』

お角は斯う云つて、其の足を痛めた美しい侍の三番の室といふのを見舞に行かうとしました。

こゝで話頭に上つた三番の室といふのは、其れは兵馬とお君との部屋をいふのではありません。二人のゐるのは一番の室であります。今の話の三番の室には刀架があつて大小の刀が置いてあります。その前の床柱に凭れてキチンと座つてゐるのは、兵馬よりは二ッか三ッも若からうと思はれるほどの美少年であります。

『御免下さりませ』

と云つてお角が其處へ訪ねて來ました。

『これは誰方』

といふ聲は少年にしては餘りに優しい聲であります。

『生憎の雨で、定めて御退窟でゐらせられませう』

『これは御内儀でござつたか、生憎の雨の事故、もう一日出立を見合せまする』

『如何ぞ御悠りとお留まり下さりませ、何しろ、音に聞えたこの笹子峠でござりまする、お天氣の時でさへ御難澁の道でござりまする』

『明朝は駕籠を頼み申しまする』

『はい畏まりました、あの明朝はこのやうに雨が降りましても、やはり御出立でござりまするか』

『左様……雨が降つては』

『雨が續きましたら、もう一日御逗留なさいませ、御覽の通りの山家、お構ひ申上げることは出來ませんけれど』

『併し……ちと急ぐこともある故、若し明朝は雨が降つても峠を越したいと思ひまする』

『左樣でござりまするか、左樣ならば其のやうに駕籠を申つけて置きませう』

『宜しく賴みまする』

『それでは其のおつもりで……如何ぞ御悠りと』

お角はお辭儀をして出て行かうとすると、

『あの御内儀……』

美少年は何か賴みたいことがあるものゝやうに、立ちかけたお角を呼び留めました。

『はい』

『ちと、お尋ね致したいが、あの峠へかゝるまでにお關所がありましたな』

『はい、駒飼と申す處にお關所がござりまする』

『あの、その關所は手形が無くては通して呉れまいか』

『それは貴方樣・お關所には何方にもお關所の御規則がありまして』

『それを如何ぞして、拔けて通る路はあるまいか』

『あの、お關所の前をお通りなされずに』

『粗忽千萬の事ながら、その手形といふものを途中で失うて困難の身の上、何と御内儀、よい智慧はござるまいか』

美少年は一生懸命で此れ丈けの事を云ひました。餘程の勇氣を持つて此の宿の主婦と見たお角に此の事を打ち明けて相談をして見る氣

になつたものであります。併し、それだけの相談として見ればそれだけの相談だけれど、表向に云へば、お關所破りの相談であります。如何したらお關所破りが出來るか教へて呉れといふやうなものであります。お角は此の少年の面を篤と見ないわけには行きませんでした。

『それは〳〵お困りの事でござりませう。外の事と違ひまして』

お角も、さすがに即答がなり兼ねるらしくありました。少年は定まりが惡いのか、窮したせいか下を向いてゐると、

『お關所の抜路をお通りなさる事や……また殿方が女の風をなさつたり、女のお方が殿方にこしらへたりしてお關所をお通りになる事が現はれまするとそれは大罪になる事でござりまする』

お角に斯う云はれて少年の面の色が火のやうに紅くなりました。

其の痛々しい若い侍の室を出たお角は、しきりに小首を傾げてゐました。さうして何か思案する事ありげに廊下を渡つて一番の室へ見舞に行かうとしました。そこには同じく雨で逗留してゐる宇津木兵馬とお君の二人がゐるのであります。

お角が其處へ行かうと思つて廊下を渡ると表の方で大聲が聞えました。それも圖抜けて大きな聲で、

『さあ〳〵、大變々々、峠へ狼が出て二人半食ひ殺されてしまつた、いやもう道中は大騒ぎ〳〵』

と云ふのであります。餘りに無遠慮に大きな聲でありましたから、お角の耳にも入つたし、其の他の人にも皆んな聞えたでありませう。一番の室へ行かうとしたお角は此の聲で直に引返して、兵馬やお君を見舞はずに帳場へ歸つて來ました。

その今の大きな聲の持主は、此の街道を往來する馬方であります。それが地聲の大きいのを一層大きくして、この店へ怒鳴り込んだのでありました。

宇津木兵馬の耳にも其の大きな聲が聞えたから愕然として驚きました。スヤ〳〵と眠つてゐたお君の眼を醒まさせる位に大きな聲でありました。

『宇津木樣、何でございます、あの騷ぎは』

『峠へ狼が出たさうな』

『怖い事、狼が』

『さうして人を二人半食ひ殺したと聞えたけれど、二人は宜いが半といふが、ちとをかしい』

兵馬とお君とは斯う云つて話をしてゐる間に、例の地聲の大きな馬方は店の方で、お角や其の他の者を相手に、盛んに大聲を上げて其の講釋をしてゐるらしくありました。それが洩れて聞える處によれば、狼に食ひ殺されたのは笹子峠の七曲りのあたりであつて、食ひ殺された人は一人の藥賣と、それから魚屋と、もう一人危なく逃げたのは道中師であるらしく聞えます。半といふのは恐らく其の道中師が命辛々逃げたから、それで半と云つたのだらうと思はれます。兵馬は、其の前路を控えた身で、こんな話を聞くことは、さすがに快しとはしませんでした。狼といふものゝ存在は豫ねて聞いてはゐるし、また此のあたりの山々には其れが住んでゐて、時あつては人里までも出て來るといふ話も聞きました。けれども其んな話をお君に聞かせる事は、よくないと思つて其れで不快の感じがしたのであります。

『夜道などをするから惡いのじや、悠くりと宿を取つて日のうちに出で、日のうちに越えてしまひさへすれば何んの事は無からうに、無理をするから其んな事になる』

兵馬はさう思ひました。一體深山に棲む狼は群を成してゐるものださうだけれど、兵馬は今までの旅に狼といふものに出逢つたことがありません。狼に出逢つた事が無いばかりでなく、狼といふものゝ生きたのも死んだのも其の實物を見たことはありませんでした。それは繪にかいたものだけによつて、さう信じてゐるだけでありました。

斯うは云うものゝ、明日、この女をつれて峠を越える時に、不意に其れ等の惡獸に襲はれたとしたら、それに對する用意をして置かなければならないのだと思ひました。

一旦帳場へ歸つて狼が人を食つた話を馬方の口から詳細に聞いたあとで、お角はまた再び第一番の室、即ち兵馬とお君のゐる處へ見舞に行かうとして廊下を渡つて行くと、

『ちよッ、ちよつと、お角』

裏の垣根越に呼び留めたものがあります。

『誰方』

お角が其の垣根越を振り返つて見ると、雨の中を笠をかぶつて合羽を着た人。

『おや、お前は百さんぢやないか』

『叱ッ、靜かに』

『誰も見てゐないから、早く其の土藏の陰から七番の方へお廻り』

『大丈夫かエ』

『大丈夫だよ、あの裏木戸から入つて』

『合點だ』

其の垣根越の笠と合羽はがんりきの百藏であることに紛れもありません。

二度まで見舞ひに行かうとして出端を折られたお角は、又しても第一番の室へ行かうとした足を引返して七番の座敷へ舞ひ戻つて來ました、この七番の座敷といふのは自分の部屋として借りてある座敷です。

お角が其處へ戻つて來た時分に、がんりきの百藏は、もう、草鞋を脱いで椽の下へ突込んで、合羽を抱えて其の座敷へ入り込んでゐました。

『おつそろしい目に逢つたよ』

『何が如何したの』

『昨日の夕方はお前、笹子峠の七曲りで狼に出逢して命辛々で逃げて來たんだ』

『さうかね、お前さんかエ、今、馬方が來ての話に二人半食ひ殺されたといふから、其の半といふのは如何いふわけだと聞いたら、それは食はれ損なつて逃げた人があるんだと云つてゐた、それがお前さんとは氣がつかなかつた、何しろ命拾ひをして宜かつたね』

『まあ宜かつたといふものだ、大丈夫かエ、誰にも氣取られるやうな事は有りやしめえな』

『大丈夫、さあ其の合羽をお出し』

お角はがんりきの手から雨に濡れた合羽を受け取つて、そつと裏の方から竿にかけました。

『やれ〳〵』

旅装を取つたがんりきは火鉢の前へ座りました。お角も亦火鉢によりかゝりました。それから、ひそ〳〵話で、時々目面で笑つたり睨めたりして、可なり永いこと話が續きましたが、

『それじや、今夜は泊り込むとしやう、たが明日の朝は、また鳥澤まで行かなくつちやあならねえのだ』

『ほんとうに落着かない人だ、いくら足が自慢だからと云つて、さうして飛び廻つてばかりゐるのも因果な話』

『如何も仕方が無えや、斯うしてセワしなく出來てゐる身體だ』

『あ、そりやさうとお前さん、鳥澤へ行くのなら、人を一人案内して上げて呉れないか、まだ若いお侍だけれど、手形を失くしてしまつて困つておゐでなさる容子、扱道を聞かして貰いたいと、わたしに頼む位だから、ほんとうに旅慣れない初心な女のやうな若いお侍だよ』

『成程、それや案内してやつても惡くは無えが、こちと等と違つてあとで出世の妨げになつても善くあるめえからな、それを承知で、よく〳〵の事情なら、隨分扱道を案内してやらねえものでも無え』

『そりやお前さん、よく〳〵の事情があるらしいね、手形を失くしたといふのは嘘で、持たずに逃げ出して來たんだね、それで、如何やら追手がかゝるものらしく、外へも出ないで隠れてゐる容子が、あんまり痛々しいから、お前さん一つ助けてお遣りよ、女のやうな優しいお侍だから可哀相になつて終う』

十一

その翌朝になつても雨はしとしと降つてゐましたが、それにも拘はらず宇津木兵馬は駕籠を雇つて此の宿を立ち出でました。

兵馬は合羽を着て徒歩で此の宿を出て、尋常に甲州街道を下つて行くのでありましたが、兵馬とお君との駕籠が此の宿を尋常に出かけた前に、まだ暗いうちに同じく此の宿を出でゝ東へ向つて下つた二人の旅人がありました。

前のは旅慣れた片手の無い男、あとに従つたのは前髪の女にも見まほしき美少年。前のはがんりきの百蔵で、後のは昨日三番の室で關所の抜け道を問ふた少年であります。

兵馬お君の一行が本街道の關所のある處を大手を振つて通るのに、がんりきと美少年は裏へ廻つて關所のない抜道を通ることが違つてゐるのであります。

本道を通ることは例外で、抜け道を通ることのみが其の本職であつた百藏は、こんな事には心得たものです。

女にも見まほしき美少年は、足を痛めたとはいふけれども、やはり旅には慣れてゐるものゝやうです。併し、兩刀の重味が如何にも身にこたへるやうで、それを抱へるやうにして、がんりきのあとをついて行くと、

『これでもこれ、お關所のあるべき處を無いことにして通るんでございますから、表向に六つかしく云へばお關所破りになるのでございますね、お關所破りの罪を表向にやかましく詮議すれば、そのお

關所のある處で磔刑になるのが御定法ですから、あなた樣も、わつし共も、御定法通りにいへば此れで磔刑ものなんでございますよ』

がいいきの云ふことは少年をして薄氣味の惡い心持を起させないわけには行きません。がいいきは其れを事もなげに云つて少年が氣にかける容子を尻目にかけて、

『併し、お役人とても其んなに野暮な仕打ばかりはございません。こんな事で一々お關所破りをつかまへて、磔刑にかけた日には關所の廻りは磔刑柱の林になつてしまひます、旅に慣れたわつし共のやうなものでなくても土地に近い人などは、わざ〳〵關所を通つて一々御挨拶を申上げても居られないから、その拔け道や裏道を突切つてしまうのでございます、そんなものは、笑つてお眼こぼしでございます、それでも、斯うして渡つて歩くうちに、如何かして間違つてお上の手で調べられた時には、こんな風に言ひ拔けをするんでございますね、實はあの勝沼の町から出まして、駒飼のお關所へからうと思ふ途中で、つい〳〵道を取り違へて山の中へ入つてしまひました、そこで如何して本道へ出たものかと迷つてゐるうちに、山の中から樵夫が出て參りました、その樵夫に尋ねて漸く本道へ出て參ることが出來ましたけれど、その時は知らず〳〵お關所を通り越して居りました、濟まない事とは思ひましたけれど、又先を急ぐ旅でございますから立ち戻るといふわけにも行かず、つい〳〵其のまゝ通り過ぎてしまひました。斯ういつて言ひ拔をするんでございますね、さうすると然らば其の方に道を敎へた樵夫といふのは何村の何の誰じやとお尋ねがある、その時は、いや其れを聞かうとしてゐるうちに樵夫は山奥深く分け入つて影も形も見えなくなりました、

と此んな風に申上げれば其れで事が濟むんでございます、お關所にも拔け道があり、お調べにも言ひ拔けの道があるんでございますがね、八釜しいのは入鐵砲に出女といつて、鐵砲がお關所を越して江戸の方へ入る時と、女が江戸の方からお關所を越えて乘り出す時は中々詮議が嚴しかつたものでございますがね、それも昔の事で、今は其んなでもありませんよ、そんなではないと云つた處で、此の頃は世間が物騷でございますから、男が女の風をしたり女が男の風をしたりしてお關所を晦ますやうな事があると、なか〳〵面倒には面倒になるんでございますね』

こんな事を云つてゐる間に、いつか關所の裏道を拔けてしまつて本道へ出て笹子峠を上りにかゝつてゐました。

なほ、がいりきは途中、色々の話をして此の少年に聞かせました。

丁度、そんなやうな雨の事ですから旅人も少いもので、山又山が重なる笹子の峠道は晝とは思はれないほどに暗いものでありました。峠を登つて行くに坊主澤のあたりへ出ました。この邊は橋が幾つもあつて下には溪流が左右から流れ下つてゐる處もあります。やがて、もう峠の頂上へも近づかうとする時分に、

『此奴は可けねえ』

とがいりきが云ひました。

今峠の上から一隊の人が下りてくるらしくあります。この一隊の人といふのは、尋常の人ではなく何か役目を帶びた人らしくあります。がいりきは其れを振り仰いで、

『あれは八州樣の組だ、うつかり斯うしてはゐられません、少しばかり姿を忍ばせませう』

斯う云つて坊主澤を左に切れて、傍道へ入りました。少年も亦、同じやうにしないわけには行きません。

成程、それは八州の役人らしい。幸にして此の役人達は今横へ切れた二人の姿を見咎めもしませんで、矢張雨の中を蕭々として甲州の方へ向けて下りて行くのは、何か大捕物でもあるらしき氣配であります。

『どうも危ねえ』

がいりきは其の横道を先に立つて行きました。これは多分天目山の方へ行かるべき路であらうと思はれます。

八州の捕方を避けて横道につれ込まれた少年は、此の案内者に相當の信用を置いてゐるらしいが、氣味の惡い感じも相當に伴はないではありません。併し何處までも弱身を見せないつもりで、それに從つて行くと、さして大木ではないけれども、杉の木立の暗い細道へかゝりました。

その杉の木立の中に、山神の祠といつたやうな小やかな社のあるのを指して、

『あれで暫らく休んで參りませう、ドノ道本道へかゝらなくてはなりません、そのうち雨も歇むことでございませう』

がいりきが先に立つて其の祠の椽へ腰をかけました。

『隨分お疲れなすつた事でございませうねえ』

『いゝえ、其れほどに疲れはしませぬ』

と云つたけれども少年は可なりに疲れてゐるらしくありました。

『何しろ、お若いに一人旅といふ事はなさるものではございませんん、あなた樣が男でゐらつしやるから宜いやうなものゝ、若し女で

もあつて御覽じろ、道中には狼が澤山ゐますからな』

がいきに斯う云はれた時に、少年はギクッとしたやうでした。さう云つたがいきい自身も亦、妙に氣が引けたらしく、

『狼、狼と云へば、この山には本物の狼がゐるんでございます、さう思うと何だか急に氣味が悪くなつて來た』

がいきは、わざとらしい身ぶるひをして前後を見廻しました。前後は杉の木立で、足下では澤の水が淙々と鳴つて、空山の間に響きます。

少年は何となし居堪られないやうな心持になつて、

『兎も角、本道へ戻らうではございませぬか』

『まあ宜うございます、まあ休んでおゐでなさいまし、どんな事をしたからと云つたつて、日のあるうちに越せねえ峠じやあございませんや、八州のお方が立ち戻つてでも來やうものなら、今度は一寸抜け道が無えのでございます、もう少し休んでゐらつしやいまし』

と云ひながら、がいきは少年の手首を取りました。

『あれ――』

少年は思はず斯う云つて叫びを立てました。

『そんなに吃驚なさる事はございますまい、お武家樣、あなた樣は男の姿をしておゐでなさるけれど、實は女でございませう』

『左樣なものではない』

『可けません、わつしは道中師でございます、旅をなさるお方の一から十まで、ちやあんと睨んで少しの外れもないんでございますから、お隱しなすつても駄目でございます』

『隱すことはない』

『それ、其れがお隠しなさるんでございます、あなた様は女でないと仰有つても、これが……』

がいゝきは其の片手を伸べて乳のあたりを探るやうにしましたから

『無禮をする』

容捨はせぬ』

少年はツト立退いて刀の柄に手をかけました。がいゝきは其れを驚く模様は更になく、

『はゝゝ、たとへ、あなた様が男でございませうとも、女でゐらつしやいませうとも、それを如何しやうといふわつし共ではございませぬ、御安心下さいまし、併し、斯うしてお伴になつて見るといふと其の本當の處を確めて置いてお貰ひ申さぬと臨機の掛引といふ奴が旨く行かねへんでございますから』

『もう、雨も小歇みになつた容子、早く本道へ戻りませう』

『まあ、もう少しお休みなさいませ、一體、あなた様は女の身で……何如してまた、わざ〳〵一人旅をなさるんでございます、それをお聞き申したいんでございますがね、次第によつては、これでも男の端くれ、隨分お力になつて上げない限りもございません』

『さあ、早く彼方へ參らう』

『まあ、宜しいじやあございませんか、私が斯うしてお聞き申すのは、實は、あなた様を何處ぞでお見受け申した事があるからでございます』

『えッ』

『たしか、あなた様を甲府の神尾主膳様のお邸のうちで、お見かけ申した事があるやうに存じて居りまする』

『知らぬ〳〵』

『あなた様は知らぬと仰有いますれど、私の方では、あなた様の御主人の神尾様にも御懇意に願つて居りまするし、それから、あなた様の伯母さんだかお師匠さんだか存じませんが、あのお絹さんといふのは、格別御懇意なんでございます、間違つたら御免下さいまし、そのお内で、たしかお松様と仰有るのが、あなた様に其儘のお方でございました』

『如何して其れを』

『がんりきの百蔵と云つて、お聞きになれば、あなた様のお近づきの人は皆んな成程と御承知をなさるでございませう』

『あゝ、それでは是非もない』

少年はホッと息を吐いて、がんりきの面を見てゐたが、遽かに聲も言葉も打つて變り、

『いかにも、わたしが神尾の邸に居りました松でございまする、斯うして姿を換えて邸を脱けて出ましたのは、よく〳〵の事情があればの事、如何ぞお見のがし下さいませ』

『それ〳〵、それで、私も安心を致しましたよ、神尾様のお身内なら、何の、失禮ながら御親類も同様、これから、お力になつて何處へなりと、あなた様のお望みの處へ落着き遊ばすまで、このがんりきが及ばずながら御案内を致します』

『何分、お頼み致しまする』

何分頼んでいゝのだか惡いのだか知らないが、此の場合お松は斯う云つてがんりきに頼みました。

『宜うございますとも、さあ、さう事がわかつたら、こんな窮屈な處に長居をするではございません、本道をサッサと參りませう』

それから後は存外無事でありました。無事ではあつたけれども、こんなに見透されてしまつた上に、これが肩書附の人間であることがわかつて見れば、決して氣味のよい道づれではありません。併し、斯うなつて見ると急に此の氣味の惡い道づれと離れることも出來ないで、お松は笹子峠を越してしまひました。人に何事か起るべくして何事も起らずに峠を越してしまひました。たゞ此も咎められず、狼にも襲はれることがありませんでした。道案内であり道づれである男が却つて追手の者よりも恐ろしいものであり、或は狼よりも怖い者であるか如何かは、まだわからない事です。

さうして黑野田の宿へ無事に着いて、まだ二三驛は樂に行ける時刻であつたけれども、其處で一先づ泊ることになりました。がんりきがお松を案内したのは、前の本陣の宿ではなく林屋といふ宿でありました。

此處へ着いての思出はお松に取つて少からぬものがあります。こゝの本陣へ駒井能登守と共に泊り合せた一夜の出來事は鮮かに其の記憶に殘つてゐるのであります。

お師匠樣のお紺が此處で何者にか浚はれて大騒ぎを起しました。狼も棲むといふし天狗も出沒するといふ、このあたりに來た時は、あんな事があり、歸る時にこんな事になつて、險呑な道づれに案内されて同じ處の宿へ泊るといふのも、お松に取つて心強いものではありませんです。

處が、此の宿へ着いて旅裝を解くと、間もなくがんりきの姿が見えなくなつてしまひました。お松は心には充分の警戒をして、萬一の

時は身を殺してもと思つてゐるのですけれども、其の警戒の相手が不意に無くなつて見ると、何となく拍子抜のやうでもありました。いく時經つても、がんりきは歸つて來ませんでした。遂に夕飯の時になつて見ると其の食膳は一人前でありました。これを以て見れば宿でも亦、自分に連のあることは認めてゐないものと見なければなりません。またお連樣はとも尋ねて見ない事を以て見れば、この宿では全然、自分に連のあつた事をさへ想像してゐないらしくあります。

お松は合點の行かない事に思ひながらも、食事を濟ましてしまひました。

日が暮れても、風呂が濟んでも、いよ〳〵寢る時刻になつても、と〳〵がんりきは姿を見せないのであります。

お松は其れを合點が行かない事に思つたけれども、また多少安心をする氣にもなりました。ナゼならば、あんな氣味の惡い男に導かれて行くことの不安心は、ゾれぬ一人旅をして歩く不安心よりも一層不安心であるからです。

前途は兎に角、あの男と離れた事が、却つて幸ひであつたと、寢床に就いた時分にホッと息を吐きました。

お松が此んな裝ひをしてまで甲府を逃れ出さねばならなかつた理由は、全く彼地では行き詰まつてしまつたからである事は申すまでもありません。内には神尾の壓迫があり、外には筑前守へ奉公の强要があり、自分としては兵馬やお君の事が氣にかゝり、能登守の運命にも同情したり、主人の神尾の擧動には身ぶるひするほどに怖れと嫌氣とを催して、如何しても居堪まられないから、此の非常手段で

逃げ出したものであります。

兵馬が惠林寺に留まつてゐる事がわかりさへすれば何の事はなかつたらうけれど、それをお松は知る事が出來ませんでした。たゞ斯うして行くうちに兵馬の行方を知る由もあらうかと思ひ、それがわからぬ時は、一層、江戸へ出て、外ながら能登守やお君の身の上に就て知りたい。また例の與八といふ男の許をも尋ねて見やうかといふやうな心持でありました。

其翌日早朝に宿を出立すると、如何でせう阿彌陀街道の外れへ來た時分に、もう其處に、旅の裝ひをして、がんりきがちやあんと待つてゐるではありませんか。尤も今日は雨が降りません。

がんりきが待つてゐたのは阿彌陀街道を過ぎて笹子川の橋詰の處であります。

お松も、はじめは其れとは氣がつきませんでした。近寄つて見た時に、それと知つてお松はギヨツとしました。

『お早うございます』

がんりきは挨拶をしました。

『これは、まあ』

と云つてお松は呆氣に取られました。

『お待ち申して居りました』

この分では、この男に見込まれたやうなものだと思ひました。

『昨夜は何處へお泊りなさいました』

とお松は尋ねました。

『ツイ此の近い處に知合があるんでございます』

がんりきは其れだけしか答へません。お松もその上は問うことをし

ませんでしたが、如何しても此の男の道づれを斷るわけには行きません。

『此處は橋詰といふ處でございます、この次がよしケ久保と申して彼處にあるのが虛空藏樣で、それと違つた此方の方に毒蛇濟度の經石といふものがございます、それから白の原に白野、天神坂を通つて立川原へ出て橋を渡ると神戸、それから中初狩に下初狩、上花咲に下花咲、大月橋を渡つて大月』

こんな事を云つて、がいりきは細かな道案内をしながら歩いて行きます。暢氣に歩いて行くやうだけれども、絶えず往來と前後とに氣を配つてゐることは、お松が見てもよくわかります。殊に前後から來る人の容貌を遠くから見定めやうとする事と、通りすがる人を横目に見やる眼つきなんぞは、氣味が惡いばかりです。

そのうち大月の手前まで來ると不意に、

『如何か一足先にお出でなさいまし、私は少しばかり廻り道をして參りますから』

と云ふかと思へば、がいりきはツイと横道へ切れてしまひました。お松と一緒に歩いてゐる時は、そんなでも無かつたけれど一人で横道へ切れる時の足の早いこと、あ、と云ふ間もなく何れへか姿を消してしまひました。

それから、お松はまた一人で歩いて行きました。この男は、慥に道中の胡麻の蠅といふものだらうと思ひました。飛んでも無いものに附き纏はれてしまつたと、泣きたいにも泣けない心持で心細い旅を歩きました。

笹子の山中で、右の男は道すがら、自分は斯う見えても女に餓えて

ゐるやうな男でないから、一人旅をなさるお前樣を取つて喰はうの煮て喰はうのといふ了見はございませんと云つた言葉を思ひ起しました。事實、あの男が自分を女と知つた上で、無禮を加へるつもりならば、今までに其の機會もあつたらう、殊に昨夜の泊りで、わざと外してしまつたのが不思議であるなどゝ、お松は考へて歩きました。

併し、氣味の惡い男は氣味の惡い男である。どうしてもあの男と道づれの緣を切つてしまはねばならぬと思ひました。それをするには如何なる手段を取つたらば宜いだらうかと、其の事をそれからそれと考へて大月から駒橋横尾、殿上と通つて漸く猿橋の宿まで入る事が出來ました。

お松は幼ない時分から諸國の旅をして歩きました。それ故に、はじめのほどは辛かつたけれど足が慣れて見れば、世の常の女のやうに道に惱むことが少いのでありました。たゞ腰に差し慣れない兩刀の重荷が苦しく、人の見ない處では其れを抱えるやうにして歩きましたが、猿橋の宿へ來て、とある茶店へ入つて一息つきました。

お松が此の店に休みながら考へたのは、やはり此の後如何にして、がんりきといふ氣味の惡い道づれを撒うかといふ事でありました。

お松の思案では、幸に此の道中で然るべき有力な旅の人を見つけて、その從者に加へて貰うか、或は同行に入れて貰へば、これから先の道中も無事であるし、あの氣味の惡い男も寄りつくまいといふ事であります。

こゝで中食をしてゐる間にも、お松は其の心持で街道の方を眺めてゐました。

暫くした時に、其の前をズッシ〳〵と通つたのは、昨日笹子峠の坊主澤のあたりで遣り過ごした八州の役人といふ一隊でありました。その一隊の人が、ズッシ〳〵と通つて行く光景は何となく穏かでありません。昨日あれから何處まで行つたのか、甲府までは行くまいけれども、勝沼あたりまでは行つて、それからまた引返して來たものに相違ないのであります。

如何に同行の人を求めたいからと云つて、あの一行の中へ驅け込むわけにも行かないから、お松は其れの通り過ぐる間は隱れるやうにして、それが遠く離れたと思はれる時分まで、わざと此の店に隙をつぶしてゐると、其處へ頰冠りをした逞しい馬子が一人馬を曳いてやつて來ました。

『御免なさいよ』

と云つて頰冠りを取つた馬子の面は日に燒けて斑だらけであるけれども、嚴めしい面で眼つきが尋常の馬子とは違うやうに見えます。眼つきが違うといつても、惡い方に違うのではありません。がんりきの百藏は身なりを小綺麗にしてゐるに拘はらず、何となく小氣味が惡い男であるけれど、今入つて來た馬子は、容貌が怖ろしげなのにかゝはらず、一見して氣味の惡いといふ感じをお松に與へないで其の御粗末な服裝の中に、何處やらに親しみのある人品が備はるやうに見えないでもありません。無雜作に入つて來たけれども其處にお松のあることを見て、丁寧に小腰をかゞめました。

此の店の親方とは、心安い間柄と見えて話しぶりも打ち解けたものです。その話を聞くと、笹子まで客を送つて行つて此れから鳥澤へ歸る處であるといふことです。

此の馬子は隅つ子へ腰をかけて、お松の方を遠慮深く見てゐたやうでしたが、

『もし、お武家様』

と云つて言葉をかけました。

『はい』

お松は馬子から言葉をかけられたので、少しうろたへて返事をしました。

『失禮でございますが、あなた様は、これから何方へお越しでございます』

『江戸へ下ります』

『左様でございますか、お一人で……』

『はい』

『如何でございませう、どの道歸りでございますから、お馬にお乘りなすつてお呉んなさいますまいか』

と云はれて、お松は馬子の面をチラと見ました。人の惡い馬方や雲介の多いことでは郡内は名うての處であります。ですから、成るべく今まで馬も駕籠も傭はない事にしてゐました。がんりきがついてゐたから、それでも今まで通つて來たけれど、これから先、一人で歩かうものなら、どんな五月蠅い勸め方をされるかわからないし、萬一自分が女と知られた上は、またどんな目に遭うか知れたものでないと思ひました。

今、こゝで此の馬子から馬に乘れと云はれて見ると、もう此れが惡强の最初ではないかと思はれて、その馬子の面を見たのですけれど主人の話し振を見ても、其の人柄を見ても、性質の惡い馬子とは見

えません。

お松は心を決めて、とう〳〵其の馬に乘ることに約束しました。

馬子は喜びました。どの道歸り馬の事だから賃錢も安くするやうな事を云ひました。お松は何處までといふ定まりを此處ではつけませんでした。けれど、實は上野原まで一氣に行つてしまはうといふ心で此の馬に乘ることにしました。

この馬子の面は何處やら、先に甲府の牢を破つた南條といふ奇異なる武士の面影には似てゐるけれども、それはお松とは更に交渉のない事ではありません。

程なく例の猿橋まで來ました。此方へ入る時にお松は此の有名な橋の傍へ駕籠をとゞめて見て過ぎました。今、馬上から其れを見るとまた趣が變つたものであります。馬子は、この橋が水際まで三

十三尋あること、水の深さも亦三十三尋あること、橋の長さは十七間あることなどを、どの客人にも說いて聞かせるやうに、お松にも說いて聞かせました。

山谷の立場で休んで犬目へ向けて歩ませた時分に傍道から不意に姿を現はした旅人がありました。お松は早くも其の旅人ががいきの百藏であることに氣が附いてヒヤリとしました。

百藏も亦ズカ〳〵と馬の傍へ寄つて、お松に向つて馴々しく口を利き出さうとした時に、前に手綱を曳いてゐた馬子が、不意に後を向きました。近寄つて來たがいきが、ハタと面を見合せた處、おかしいことに、がいきが甚だしく狼狽しました。兎も角相當の惡黨を以て自任してゐるらしいがいきが、此の馬子の面を見ての狼狽方は尋常とは見えませんでした。

それが爲に折角お松に近寄らうとして來たがんりきが一言も物を云う遑がなく、タヂ〳〵と下がつて苦い面をしたが、そのまゝ前へ突き抜けてトットと早足に行つてしまう有樣は逃げて行くものゝやうであります。がんりきが、しかく狼狽するにかゝはらず、馬子は悠然たるもので、

『あはゝゝ、足の早い野郎だ』

と笑つてゐました。

成程、足の早い野郎で、忽ちに後影さへ見えなくなつてしまひました。

『お武家樣、お前樣は、あの男に見込まれなさいましたね、お氣をつけなさらなくちあ可けませんせ、彼奴は拗執い奴でございますからなあ』

『馬子どの、お前は、あの人を知つておゐでなのか』

『知つて居りますよ、いやに惡黨がつて喜んでゐる他愛もない奴でムいます』

『實は、あの者に取りつかれて困つてゐます、何とか遠ざける工夫は無からうか』

お松は、つい此の事を馬子に向つて口走りました。

『左樣でございますねえ、今度、出て來たら取捉まへて何とかして見ませう』

と馬子は云ひました。何とかして見るといふのは如何して見るつもりなのだらう。けれども此の馬子が、がんりきを怖れないと、反對に、がんりきが此の馬子を怖れて逃げたことは今の擧動でわかるのですから、お松は何となく此の馬子を心強いものに思ひます。

この馬に乗つたお松は犬目新田も過ぎ、矢壺の座頭ころがしの險も無事に通つて例の鶴川の渡し場まで來ました。

こゝは、その前の時分に宇治山田の米友が坊主にされた處でありまし。此處まで來る間に、如何したのかがんりきの百藏は丸きり音沙汰がありません。

前の時には、大勢の川越人足がゐたけれども今は水の出も少いし、人足でなしに、橋を架けて橋錢を取つて渡してゐました。定めの橋錢を拂つて、此の橋を渡りきると、以前川越人足が詰てゐた小屋がおります。その小屋の中に休んでゐたのは例の八州の役人と手先とでありました。

『これ待て』

お松を乗せた馬が此の前を通つた時に呼びかけました。南條に似た馬子は其の聲を聞いて聞かないやうな振して行かうとするのを、

『その馬待て』

二度呼び留めましたけれども、馬子は矢はり聞かないふりをして行つてしまひます。役人は後を追つかけて來るかと思ふと、それつきり何の音沙汰もありませんでした。だからお松の乗つた馬は無事に渡し場を越えて上野原の宿へ入りました。

こゝで若松屋といふ宿屋へ此の馬子によつて案内されました。これから江戸へ行くまで放したくない馬子だと思ひました。けれども、さういふわけには行かないから、お松は此の馬子に定めの賃銀と若干の酒料とを與へて、自分は、また一人で心細い宿屋の一室へ隱れるやうにしてゐました。

さて斯うして見ると、がんりきの事が思ひ出されます。あの馬子の

面を見て逃げた狼狽さも可笑しいけれど、それつきりで出て來ないといふ男ではない筈であります。馬子を歸してしまつて此れからの道も心細いが、またあの男に出て來られる事も氣味が惡い。お松が其の兩方を考へてゐる處へ、

『お客樣、誠に恐れ入りまする、八州樣の御用が參りました』

『八州樣の御用とは』

『この邊をお見廻りのお役人のお手先でございます』

『役人に調べられるやうな筋は無いが』

『さあ、如何いふわけでございますか、先刻お馬でお着きになつた若いお武家の方にお目にかゝりたいと申して店へお出向になりましてございます』

『はて、先刻馬で着いたといへば、如何やらわし一人のやうな』

『左樣でございまする、外にお馬でお着きになつたお方もございますれど、若いお武家樣と仰有られると貴方樣の外にはございませぬ』

『わしに何の用向か知らんが、合ひたく無いものじや』

『それでも、ちやんと、おあとを見屆けてお出でになつたものでございますから、外樣と違ひましてお斷り申すことは出來ないので困つて居りまする……』

『そんなら是非もない、合ひませう、これへお通し下されたい』

とお松は云つて番頭を歸しました。

けれども此れは安からぬ思ひであります。この際に役人から取調を受けるといふ事は一大事であります。併し斯うなつて見ては逃れる事が出來ません。斷ることも出來ません。斷れば職權を以て踏込むに相違ない。逃るれば手分けをして引捕へるに相違ない。合つて見

るより外は如何にも仕方がないのであります。此の位なら、一そ、がんりきと連になつてゐた方が、また智慧もあつたらうにと思はれるのでありました。さうして胸を痛めてゐる處へ案内につれて、八州の役人と手先がズカ〳〵と入つて來ました。

お松は胸が噪いで氣が嚇つと逆上るやうであります。

『ちと、お尋ね致したいが其許様は何れからお越しになりました』

入つて來た八州の役人といふのは、割合に丁寧な物の尋ねやうでありました。

『拙者は甲府より參りました』

お松も一生懸命で度胸を定めて返事をし初めました。

『甲府は何れのお身分』

『勤番支配、駒井能登守の家中の者にござりまする』

『駒井能登守殿の御家中とな、失禮ながら御姓名は』

『和田靜馬と申しまする』

『和田靜馬殿』

と云つて役人は小首を傾げましたが、

『して、これより何れへお越し』

『主人能登守の後を慕うて江戸まで出まする途中』

『たゞ御一人にて』

『左様、それには少々事情ありて主人の一行に後れ申しました』

『兎も角、少々御意得たきことがござる故、本陣まで御足勞下さるまいか』

『それは迷惑な』

『強つてとはお願ひ申さぬ、實は貴殿のお身の上と云ひ、只今承

はつた處と申し、ちと不審の議がござる』

『不審と仰せらるゝのは』

『宜しい、然らば後刻また改めてお伺ひ致さう、御迷惑ながら其れまでは此の宿をお立ち出でなさらぬやうに願ひたい』

『心得ました』

『これは御無禮の段お詫を申上げる』

と云つて役人と手先とはゾロ〳〵と歸つてしまいました。

兎も角も歸つてしまつたから、お松はホッと息を吐きました。ホッと息は吐いたけれど此れは、いよ〳〵安心がならないのであります。存外、立ち入つて調べる事はしなかつたけれども、實は此處へ檢束されてしまつたのと同じことであります。後刻といふのは何時頃の事か知らないが、その時に來て委細を調べられてしまへば、何

もかも曝露されてしまう事であります。關所を拔けて來た事も表向きになつてしまはねばならぬ。駒井能登守家中といふ事や、和田靜馬といふ事の化の皮も立處に剝がれてしまはねばならず、その上であられもない男裝して神尾の家を拔け出したことの一部始終は他愛もなく露見してしまうのであります。お松は漸く絕對絕命のやうな處へ追詰められる氣持に迫られて、いざといへば自害をして果てるばかりと小刀を膝の處へ取り上げて、その後の成行を怖ろしい思ひで待つてゐました。

けれども待ち構へてゐる役人も手先も容易にやつて來る模樣は見えませんでした。可なり身體も心も疲れてゐるから、もう寢てしまいたい時刻であつたけれど、いつ役人が押しかけて來るか知れないのだから、寢てしまうわけにも行きませんでした。

行燈の影に、ぼんやりと小刀を膝の上へ載せたまゝで、限りのない心細い思ひと、それから危險を前にした一種の張りきつた心とで、お松は事の成行を待つてゐます。

甲府から江戸までは僅かに三十餘里の旅、前に長い旅をしてゐた經驗から、それを餘りに多寡を括つた無謀を事毎にお松は覺つて來るのでありました。

『若し、役人に引立てられて本陣をやらへ行かねばならぬ場合には自害する、一層、斯うなつては、其の前に此處で死んでしまつた方が宜いかも知れぬ』

お松は調べられて一切が曝露した曉に恥辱を取るよりは、其れより前に死んでしまつた方がと、さしもに氣が張つてゐるお松も、とても逃れぬ運命と死を覺悟して見ると、一時に心弱くなつて來て涙を落しました。

その時に、役人の來るべき表口でなく、障子を隔てた廊下の方で人の氣配がするやうであります。

十二

お松が斯うして宿に着いた時よりは少し遲れて、同じやうな客が此の上野原の本陣へ同じやうな方向から來て宿を取りました。それはお松のやうに忍びやかに來たのではなく、大手を振らないまでも、旅路には心置のない人のやうでありました。

その客は、お松と同じやうな若い侍の姿をしてゐましたけれど、お松のやうに單獨の旅ではなく、他に一挺の駕籠と共に、自分も此

處へ着く時は駕籠へは乘つて來たけれども、寧ろ他の一挺の駕籠を守護して來たものゝやうであります。

本陣へ着いて間もなく、守つて來た他の一挺の駕籠の人を隱すやうに別間へ置き、自分は其の次の一室を占めました。申すまでもなく其の隱すやうに守護して來た人といふのはお君で、それに附いて來た人は宇津木兵馬であります。兵馬が其の一室に控へてゐる時に、これもお松が受けたと同じやうに、例の八州の役人の見舞を受けました。

『はて、八州の役人が何用あつて、我々を詮議する』

と兵馬は訝かりましたけれど、それに應對する用意は充分であつて表面上は何等の咎め立を蒙るべき由もないのであるから、お松のやうな不安な心でなしに、立處に其の役人を迎へました。

役人は、またお松にしたやうに、其の何れより來り何れへ行くやを尋ねました。また兵馬に向つて身分と姓名とを尋ねました。その時兵馬は答へました。

『甲府勤番支配、駒井能登守の家中、和田靜馬と申す者』

『ナニ、貴殿が和田靜馬殿と申される』

役人は眼を丸くしました。その上に念を押して、

『お間違ではござるまいな、しかと貴殿が和田靜馬殿か』

『御念には及び申さぬ、元、駒井能登守の家中にて和田靜馬と申すは拙者の外にはござらぬ』

『處が、その和田靜馬殿が二人ござるから物の不思議じや』

『何と云はれる』

『然も、同じく此の上野原の宿屋へ、今日泊り合せた客人に、同じ

く駒井能登守殿の家中にて和田靜馬殿と名乗る御仁がござる』
『これは不思議千萬、その者は何れの宿に居て、何を苦しんで拙者の名を騙る』
『それは只今、我々が確に會うて其の名乗を承はつて參つた、當所の若松屋といふのに、今も尋常に控へて居らるゝ』
『はて怪しい、して其者の年頃は』
『貴殿よりは一つ二つお若うござるかな』
『それほどの年にしては大膽な、兎も角、それは心あつてする事か、或ひはまた旅路のいたづら心から、わざと拙者の名を用ひるものか、これへ同道して突き合はせて御覽あれば直ぐにわかる事』
『如何にも、貴殿が、まことの和田靜馬殿であることは、惠林寺の先鋼でも毛頭疑ひのない處、若松屋の若者こそ甚だ怪しい、篤と吟味を致さねばならぬ』
『引捕へて是へお伴れあらば、拙者から懲らして濟むものならば懲らしめ、意見して追ひ放すべき者ならば意見を加へて見るも苦しうござらぬ』
『然らば其の者を引捕へて、これに連れて參らう』
役人や手先が立ち上つた時に、兵馬は不圖何事か胸に浮んだらしく
『お待ち下さい、何にせよ、承れば年若の者、無下に恥辱を與へるも不憫故、拙者、これより同道致し、穏かに其の者に會うて見たい』
『それは御隨意』
兵馬は身仕度をして、わが變名の變名を名乗る若者の何者であるかを見定めやうとしました。

若松屋の一室に和田静馬と名乗つたお松は、非常の覺悟をしてゐます。

和田静馬の名は或時に於て兵馬が假に名乗る名前でありました。お松は其の名を此の場合に利用した事が、此んな風に喰ひ違つた事を知らう筈がありません。

再び役人の來るべき時を豫想して待つてゐると役人は來ないで、障子の外に人の氣配がしたかと思うと、密と其處を開いて、

『御免なさいまし』

小さい聲で云ひながら面を出したのは、思ひきや、がいりきの百でありました。

『……』

お松は呆氣に取られてゐると、

『また參りました』

來なくても宜い男であります。お松は苦りきつてゐました。

『また參りましたのは、大變が出來たからなんでございます、大變といふのは、わたし共の方の大變ではございません、貴方樣の方の大變なのでございます、その貴方樣が斯うして落着いておゐでになる氣が知れません、一刻も早く此の場をお逃げ出しになりませんと命までが危なうございますよ、それで、わたし共が又迎へに上つたんでございます、早くお逃げなさいまし、わたしと一緒に此の宿屋をお逃げなさいまし、取る物も取り敢ずお逃げなさらなくては可けません、第一お關所破りだけで、命と釣替がものはあるんでございますから、是が非でも逃げなくてはなりません、さあ、お逃げなさいまし』

がいりきは執念深くお松を伴れ出しに來たものとも思へるし、また一種の親切で逃がしに來たまのとも思はれるのであります。けれども、お松は、さすがに此の男の言ひなりに共れではと云つて逃げ出す氣にはなれないでゐると、

『何を考へてお出でなさるんでございます、實は斯ういふわけなんでございます、貴方樣が、この宿屋へ駒井能登守樣の御家來だと云つてお泊りなさつてゐると、丁度本陣の方へ、その本物の能登守樣の御家來が、ちやあんと着いてお出でなさるんだ、役人から、貴方樣のお話を聞いて、能登守の家中に左樣な者があるとは訝しいとあつて、今此方へ調べにお出でなさる處なんでございます、それにつかまつて御覽じろ、退引がなりません、それを聞き込んだから、わたしは斯うして拔がけをして御注進に上つたわけなんでございます、惡い事は申上げません、兎も角も此の場だけは外さなければ、貴方樣の動きが取れません、決して惡い事を申上げるんではございません』

がいりきに斯う云はれて焦き立てられて見ると、お松の心が動かないわけには行きません、ドノ道危ない道を踏んだ以上は、手を束ねて捕はれの身になることも忌やです。所詮死を決してからには、逃げられるだけは逃げた方が怜悧ではないかとさへ思はれるのであります。併し、人もあらうに、此の男の手引で夜分逃出すといふ事はいくら何でも、まだ其の氣にはなれないでゐる處へ、表の戸をドン〳〵と叩いて、

『先刻お尋ねした和田靜馬殿にお目にかゝりたい、案内を賴む』

それは紛れもなき役人達の聲であります。お松は此の聲を聞くと、

さすがに狼狽へて立ちかけた處を、がんりきは其の左の手でお松の手首をとつて、

『逃げなくちや可けません、お逃げにならなくちや損でございます、馬鹿正直も時によりけりでございます』

早や表の方では役人達が案内されて此方へ來る足音が聞こえます。

お松は我を忘れて大小を抱へると、がんりきは早くもお松の荷物を取つて肩にかけてゐて、再び其の手を取つて、引ずるやうに廊下へ飛び出しました。

事の急なるが爲にお松は、心ならずも、がんりきに引摺られるやうにして此の家を外に飛出しました。

外に出て見ると外は眞暗です。その眞暗な中を、がんりきは案内を知つてゐると見えて、お松の手を引きながらズン〳〵と進んで行つたが、

『誰だッ』

途中で不意に異樣な聲を立てゝ、お松の手を放してしまひました。

『ア痛ッ』

最初誰だッと云つた時に、がんりきは何者にか一擊を加へられたやうでありましたが、二度目にア痛ッと云つた時には、たしかに大地へ打ち倒されてゐたものであります。

『うーん』

と云つて、がんりきが地上で唸つてゐるのを聞けば、打ち倒された上に、手強く締めつけられてゐるものゝやうでありました。さてはお松は驚いて、木蔭に身役人の手が、もう此處まで廻つてゐたかと

を忍ばせました。それにしても、不思議なのは、若し役人であるな

らば、御用だとか神妙にとか言葉をかけて打つてかゝるべき筈であり、何も、がんりき一人だけを狙はないで、當の自分にも、言葉がかゝりさうなものです。それを不意に闇の中から出て、がんりき一人だけを打ち倒したのは如何いふつもりであるか、さつぱりわかりません。

『覺えてやがれ』

やゝあつて、斯う云つた其れは、がんりきの聲でありました。それは少しばかり遠い處へ離れて聞えました。大地へ打ち倒されたのが如何かして起き上がつて、命辛々逃げ出した捨臺詞のやうに聞えてそれから後は靜かになりました。お松は身體を固くして木蔭に隱れてゐると、

『もし〳〵、若いお武家』

それは聞いたやうな聲でありました。聞いたやうな聲で、たしかに自分を呼ぶのだとは思ひましたけれども、お松は此の場合に咄嗟に返事をする事が出來ませんでした。それ故に尙も身を固くして木蔭にひそんでゐると、如何やら其の者が自分に近く探り寄つて來るらしくあります。

お松はそれで身構へをしました。がんりきをさへ取つて押へる位の者に、自分が身構へをした處で甲斐のない事とは思つたけれど、其れでも身構をしてゐると、その者は直に近寄つては來ないで、そこへ蹲くまつて、カチ〳〵と燧を切りはじめました。さうして其の火を小田原打灯にうつしてゐる事がよくわかるのであります。提灯をつけられては堪まらない、もう絶體絶命と思つて、お松は其の提灯の光を慄えながら見てゐると、意外にも其の提灯の光にうつ

る人の面は見たやうなと思ふも道理、それは今日猿橋の宿から此の上野原まで自分を載せて來た馬子でありました。此の馬子を見た最初にがんりきは逃げ出してしまひました。この次に逢つた時は取つて押へてやると云つてゐました。昨夕あの宿へ自分を送りつけた後は、鳥澤とやらへ歸つてしまつたものと思つてゐたら、まだあの宿に泊つてゐたものらしい。

『如何なさいました、怖い者ではござらぬよ』

馬子は提灯をさしつけて、お松の隱れてゐる木下闇を照しました。お松の足は、ひとりでに其の木下闇から離れて、馬子の提灯の方に引き寄せられました。

この時に、がんりきは何處へ行つてしまつたか姿も形も見えません。

『これから私が案内をして上ます、御安心なさいまし』

馬子はお松の先に立つて崖道を桂川の岸へと下りて行きます。しばらくして此の馬子は桂川の岸にある船小屋の處まで來ました。そこで振返つてお松の面を見て莞爾と笑ひました。お松は提灯の光りで其の面を見たけれども、其の意味を解することが出來ませんでした。

小屋の中には誰も住んではゐません。爐の中には火も無ければ燃えさしもありません。

馬子は提灯を羽目の一端にかけて置いて、床板を上げると其の中から空俵を程よくからげたのを一つ取り出しました。それを手早く解して開くと、其の中に何時用意してあつたのか、一組の衣類と見苦しからぬ拵への大小一腰が現はれました。

馬子は自分の衣裳を脱ぎ捨てゝ、空俵に包んであつた衣類を着替て

しまひました。それも亦見苦しからぬ武士の着る衣裳であります。衣裳を着替へて帶を締めて、それから足をこしらへにかゝる手順が慣れたものであります。

身仕度をしてしまつてから、腰をかけて草鞋を二足取つて其の一足をお松の前に投げ出し、

『これをお穿きなさい』

お松に當がつて自分も亦其の一足を穿く。

お松はたゞ此の奇異なる人の爲す處を夢見るやうな心持で見て、その爲せといふまゝに從ふより外はありませんでした。

『これから御身と共に、拙者も江戸立ちじや』

と云つて、サッサと先に立つて、例の提灯を持つて此の舟小屋を立ち出でました。お松も無論其のあとに從ひました。小屋を出て河原の町の方を見上げると、提灯の影が幾つも飛んで、人の罵る聲などもします。

それを見てゐた奇異なる武士は、何と思つてか自分の小田原提灯をフッと吹き消しました。四邊は、やはり眞暗で、桂川の川波のみが音を立てゝ噪いでゐます。その暗い中で、奇異なる武士は無言にお松の手を取つて引き立てました。併し其疲れきつてゐるのを認めて

『拙者の脊中をお貸し申さう、遠慮なさるには及ばぬ、それがお互に樂で宜しい』

奇異なる武士はお松を脊負うて、桂川の岸の大石小石の歩きつらい中を飛び越えて、流れと共に下つて行くのであります。

（慢心和尚の卷了）

大菩薩峠

（道庵と盲人の巻）

中里介山著

一

下谷の長者町の道庵先生が此の頃何か氣に入らない事があつてプンプン怒つてゐます。

その氣に入らない事を、よく尋ねて見ると成程と思はれる事もあります。それは道庵先生の直隣の屋敷地面を買ひつぶして贅澤な普請をはじめたものがあるのであります。道庵先生ほどのものが、他人の普請を嫉むといふ事はありません。其の普請が出來上るまでは、先生は更に頓着をしませんでしたけれども、いよ〳〵出來上つて其

の事情が知れた時に、先生が非常に憤慨してしまひました。その普請といふのは其の頃有名な鰡八大盡といふものゝ妾宅なのであります。鰡八大盡といふのは其の頃の成金の筆頭でありました。見すぼらしい棒手振から仕上げて今日では其の名を知らないものゝないほどの大盡であります。それは國内に聞えた大盡であるのみならず、外國人を相手に手廣い商賣をしました。絲の取引をしたり唐物の輸入をしたり、金銀の口錢を取つたり、其の富の力の盛んな事は外國までも響き渡るほどの大盡でありました。

『おれの隣へ來たのは鰡八の野郎か、それとは知らなかつた、口惜しい』

道庵先生は其れと知つた時に齒嚙みをしたけれど、もう追附きません。

其の妾宅が出來上ると盛んなる披露の式がありました。集まる者、朝野の名流といふほどでもなかつたけれど、多種多樣の人が集まつて、萬歲の聲が湧くやうでありました。それを聞いて道庵先生は、火のやうに怒つてしまひました。其の後とても、毎日々々、鰡八大盡の妾宅へ詰めかける朝野の名流(?)は少い數ではありませんでした。其の門前の賑やかな事は長者町初まつて以來の景氣であります。

處が道庵先生の方は相變らずの十八文でありました。その門を叩く人も十八文に準じた人で朝野の名流などは餘り集まらないのであります。

今まで十八文で賣つてゐた道庵先生、長者町といへば醉ぱらいの道庵先生と受取られるほどの名物であつた先生が、鰡八大盡の妾宅が出來てからといふものは、その名物の株を奪はれそうになつたので

あります。道庵先生が憤慨するのも道理が無いわけではありません。鰡八大盡の方とても、故らに道庵先生の隣を選んで普請をはじめたわけでは無からうけれど、偶然にさうなつた事が可笑なものでありました。殊に門が崩れ、塀が破れ家が傾いた先生の屋敷の地境へ持つて行つて、御殿を見るやうな大きな建築が湧き出し、その樓上で朝野の名流だの、絶世の美人だのが豪華を極める處を、道庵先生が椽側で藥草などを乾かしながら見上げてゐる心持は、どんなものでありませう。

『今に見てゐやがれ、鰡八の野郎ヒデエ目に逢はしてやるから』

道庵先生は、こんなわけで此の頃はプン〳〵怒つてゐるのでありました。

鰡八大盡の方では、こんなわけで道庵先生を敵に持つた事は一向知りませんでした。大盡が其の高樓の上から、先生の屋敷と庭とを一眼に見下ろして、

『汚い家だな、何とかして早く買ひつぶしてしまへ』

と云つて不快な面をしてゐました。それで三太夫が人を介して内々買ひつぶしの相談に當らせて見やうとすると、あれは有名な變人だから、そんな話しを持ち込まうものなら却て飛んだ事壞しになります。まあもう少し時機をお見合せなさいましといふ事であつたから大盡には其の事を云はないで置いてありましたけれども、此處に鰡八大盡と道庵先生とが表向いて相爭はなければならない事情が出來たのは是非ない事と申すより外はありません。

それは鰡八大盡が、ある夜此の妾宅の樓上へ泊り込んだ時に、不意に食あたりに苦しめられて、上を下へと騒がせた事がありました。

大盡は非常に苦しみました。いかに大盡の力を以てしても、雇人達の追從を以てしても、病氣ばかりは醫者の手を借らなければならないのであります。その醫者としても、この場合に於ては、遠くの名醫博士よりも、近くの十八文を有難く思はねばならないのでありました。そこで家の子郎黨達は取る者も取り敢ずに道庵先生の門を叩きました。

この時に、道庵先生の門を叩いた家の子郎黨達が心得のある人であつたならば、相手が何しろ道庵先生だといふことを腹に置いてかゝるのだけれど、不幸にして其の連中は、それだけの心得も嗄も無い連中が、狼狽て駈つけたもんだから、鯰八大盡の爲にも、道庵先生の爲にも悪い結果を齎すといふ事を夢にも豫想はしませんでした。

『今晩は、今晩は』

大盡の家の子郎黨は、傾きかゝつた道庵先生の家の門を荒々しく叩きました。

『國公起きて見ろ、忌に荒つぽく門を叩く奴がある、こちと等の門なんぞは、下手に叩かれたんでは引繰返つてしまはあな』

道庵先生は其の音を聞きつけて寢床の中から藥箱持ちの國公に差圖をしました。

國公は、慣れたものだから直に起きて案内に出ました。

『どーれ』

國公が應接に出たけれども、道庵先生の寢てゐる處と玄關とは、いくらも隔たつてゐないのだから、先生は其の應待の模樣を、いつも寢ながらにして聞いてゐて、それによつて病氣の模樣を察し、急いで、駈つけるべき必要があると認めた時は急いで駈つけ、悠々して

ゐた方が病人の爲になると思つた時は、わざと悠々したりなどするのが例でありました。

『今、御前が御急病でゐらつしやる、先生に大急ぎで出かけて戴きたい、御前はお氣が短くてゐらつしやるから、愚圖々々してゐるとお爲になりません、寢卷のまゝで決して御遠慮なさるには及びませんから、斯ういふ場合でございますから、失禮は私共から、あとで幾重にも取りなして差上げますからどうか御一緒に願ひたいもので』

國公が玄關の戸を開けるを待ち兼ねて外から斯ういふ挨拶でありました。寢ながら聞いてゐた道庵先生は、どうも解せない挨拶だと思ひました。第一御急病でゐらつしやる御前といふのは何者であるかといふ事も解せないのでありました。それに氣が短くてゐらつしやるから、愚圖々々してゐると爲にならないといふ言分は、考へて見

るとおかしな言分でありました。お氣が短かくてゐらつしやらうとお氣が長くてゐらつしやらうと、此方の知つた事ではないのであります。寢卷のまゝで御遠慮をなさるには及ばないから出て來いといふ言草も隨分緩つた言草であります。失禮はあとで取なして上げるといふのは一體誰に向つて云つたのだらうと道庵先生も少しく面喰つて、世には粗忽かしい奴もあるものだ、賴まれる方へ向つてすべき挨拶を賴む方からしてしまつてゐる、急病で氣が顚倒してゐるとは云ひながらオカしな奴等だと道庵先生は腹の中で可笑がつてゐました。

道庵先生にも解せなかつたやうに取次の國公にも解せなかつたから眼をパチ〳〵して、

『一體、何方からお出でなすつたんでございます』

『何方？からさう〳〵それ〳〵此のお隣の大盡から參りました。大盡が只今御急病でゐらつしやるから、それでお使ひに』

使ひの者が斯う云つた時に、

『馬鹿野郎！』

道庵先生がバネのやうに起き上がりました。

『何でエ、何でエ』

道庵先生はムックリと刎起きて、寢卷の帶を締直す隙もなく、枕許にあつた藥研を抱へて玄關へ飛び出しました。

若し先生が心得のある武士であつたなら藥研を持ち出すやうな事は無かつたでありませうけれど、先生の枕許には別段に武器の類を備へてありませんでしたから、先生は有り合せの藥研を抱へて飛び出したものであります。さうして玄關へ飛び出した先生の擧動は確かに鰡八大盡の使者を驚かすに足るものでありました。擧動だけが使者を驚かすのみでなく、其の言葉も彼等の度膽を抜くに充分なのでありました。

『さあ承知が出來ねエ、もう一遍云つて見ろ、手前達は何處から、誰に頼まれて來たのか、もう一遍云つて見ろ』

先生は藥研を眼よりも高く差し上げて、鰡八大盡の使者を睨みつけた處は、可なり凄いものでありました。

『私共はお隣の鰡八大盡の邸から上りました……』

『鰡八が如何した、その鰡八が如何したと云ふんだ』

『鰡八の御前が急に御大病におなりなさいましたから、先生に診て戴きたいと思つて上がりました』

『それから如何した』

『元々、鰡八の御前は、滅多なお醫者様にはおかゝりにならないお方でございます、立派なお醫者様をお抱へ同様にしてあるのでございますが、何分今晩の處は急の御病氣だものでございますから據處なく先生の處へ上がつたわけなのでございます』

『さうか、據處なく、俺の處へ頼みに來たのか、よく來て呉れた』

『何が御縁になるか知れたものではございません、これから此方の先生も、大盡へお出入が叶うやうになるかも知れません、若し、これが御縁で大盡のお氣に入りにでもなつてお出入が叶うやうになりますれば、使ひに立つた私共までが面目でございます』

『この馬鹿野郎』

道庵先生は、この時に眼よりも高く差上げてゐた藥研を力を極めて玄關先へ投げつけました、藥研は凄じい音をして、鰡八大盡の使者の足許へ落ちました。それと共に爆裂彈の破裂するやうな道庵先生の大音で

『態あ見やがれ！』

使者の連中は、この人並ならぬ道庵先生の擧動と足許で破裂した藥研の響きで腰を抜かす程に驚きました。

物を知らないといふのは怖ろしいものであります。使者の連中も、最初から道庵先生と心得てかゝればこれほどの事は無かつたであらうに、惜しいことに、その邊の注意が行き届かなかつたから斯ういふ事になつたのは返す〳〵も殘念でありました。

『こりや氣狂だ』

長居をしては如何いふ目に逢うか知れないと思つて、あはてふためいて這々の體で使者の連中は逃げ歸つてしまひました。

斯うして彼等を追返したけれども道庵先生の餘憤はまだ冷めないのであります。寢卷のまゝで庭へ飛び下りました。庭へ飛び下りて用心梯子の處まで來ると、それへ足をかけて見る〳〵屋根の上へ登つてしまひました。雇人の國公は、先生として斯樣な擧動は有勝の事だから、別段に驚きもしないし、今、物狂はしく屋根の上へ登つて行く道庵先生を見ても、それを抱き留めやうとも何ともしないのであります。

それよりも今、道庵先生が投げた藥研を玄關の鋪石の處から拾ひ上げて、轉んだ子供をいたはるやうに撫でてゐましたが、それが鋪石に當つて、多少の凹みが出來たことを惜しいものだと思つてゐます。先生がムキになつて何かを拋り出して大切の物を創にするのは今に始まつた事ではありませんでした。

この夜中に屋根の上へ登つた道庵先生は其れでも辷り落ちもしないで、やがて屋の棟の上へスックと立ちました。

こゝから見上げると、鰡八大盡の大厦高樓は眼の前に聳えてゐるのであります。道庵先生は其れを睨みつけながら、

『鰡八、鰡八』

と突拍子もなく大きな聲で怒鳴りました。近所の人は其の聲に夢を破られたものもあつたけれど、直にまた例の道庵先生かと思つて、わざ〳〵起きて容子を見屆けやうとするものもありませんでした。

けれども、當の鰡八大盡の家では其の大きな聲で驚かされないわけには行きませんでした。殊に時めく大盡に向つて、鰡八、鰡八と云つて横柄に頭から呼びかけるやうな人は滅多に無い筈なのであります。

丁度其の高樓の二階の一間で急病に苦しんでゐた鰡八大盡は、今少しばかり其の苦しみが退いたので附添のものもホッと息を吐いてゐる處へ、外の闇の中から、何處ともなく此の突拍子もない大音で、

『鰡八、鰡八』

と呼びかけたのが耳に入りました。

『あれは誰だ』

と其れが大盡の耳ざわりになつたのは道庵先生に取つては誂へ向きであつたけれど、並んでゐる人達に取つては身體を固くするほどの恐縮なのであります。何かにつけて誤魔かさうとしてゐる時に、又しても、

『鰡八、鰡八』

と破鐘のやうな大きな聲で續けざまに呼び立てる聲がします。

『あれは誰だ』

急病は一時落着いたけれど、この聲で大盡の落着きが亂れて來るやうであります。鰡八、鰡八と、事も無げに自分を呼び捨てる怪物が外にあると思へば善い心持はしないらしくあります。それが怪物であるならば、まだよいけれど、人間であるとして見れば、打ち捨てゝは置かれないのであります。大盡は其の聲のする方を睨めてゐると、

『氣狂ひでございます』

さきに道庵先生の處へ使者に行つて逃げ歸つたのが恐る〳〵大盡に向つて斯う云ひました。

『隣りの屋根の上あたりでする聲のやうだ、隣りは一體何者が住んで居るのだ』

大盡は耳をすまして、尙ほ其の聲を聞かうとしながら附添の者にたづねると、

『貧乏醫者でございます、貧乏な上に氣違ひ同樣な奴でムいます』

『怪しからん、ナゼ早く買ひつぶして立ち退かせないのだ』

『それが如何も……』

大盡の御機嫌が斜になるのを附添の者はハラ〳〵してゐると、

『鰡八、病氣はどんな鹽梅だ、ちつとは落着いたかい』

屋根の上で斯ういふ大きな聲がしました。

『怪しからん』

『鰡公』

『憎い奴だ』

『鰡公よく聞け、手前は貧乏人から其れまでの人間になつた男だから、兎も角も物の道理はわかるだらう、手前の廻りにゐて胡麻を擂つてゐる奴等が禮儀を知らねえから其れで此の道庵が癪にさわるんだ、口惜しいと思つたら鰡公、此處へ出て來て、道庵の前へ手を突いてあやまれ、もし、あやまらなければ、この後は道庵にも了簡がある、と云つた處で、おれは手前より慥に貧乏人だ、貧乏人だから金で手前と競爭するわけにやあ可かねえ、さうかと云つて劍術や柔術の極意にわたつてゐるといふわけでもねえから、腕づくでも危ねえものだ、けれども、おれにはおれでお手前物の毒といふものがある、色々の毒を調合して飲ませて恨みを晴すから覺悟をしろ』

この道庵先生の露骨にして無遠慮なる暴言は、あたり近所に鳴はためくほどの大きな聲で怒鳴り散らされました。

先生は、それで漸く、いくらかの溜飲を下げて屋根の上から下りて

來ましたけれど、鰡八大盡は言ふばかり無き不快を感じて病氣も忘れて荒々しく寢床を立つて雨戸を押し開いて欄干から外の闇を睨みつけましたけれど、その時分には道庵先生は、もう屋根から下りて自分の寢床へ潜り込んでしまつてゐました。鰡八大盡は、可なりに腹が大きいから、そんなに物事を氣にかける男では無かつたけれどこの道庵の暴言は聞き捨てにならないと思ひました。

よし、そんならば、いくら金がかゝつても宜しい、あの屋敷を買ひつぶせ、あの屋敷も賣らないと云へば、その周圍の地面家作を買ひつぶして、道庵を白滅させるやうに仕向けろと、執事や出入の者に其の場で固く言ひつけました。

その後、鰡八大盡の御殿と、道庵先生の古屋敷との間を見てゐると隨分、可笑なものでありました。

大盡の方では、絶世の美人だの、それに隨ふ小間使だのといふものを、高樓に上せて、道庵先生の古屋敷を眼下に見下させながら、そこでお化粧をさせたり、艶めかしい振舞をさせたり、鼻をかんだ紙を投げさせて見たり、哄と聲を上げて笑はせたりなどしてゐました。

それを見た道庵先生の方は、また道庵先生の方で、屋根の上へ一ばいに櫓を組みはじめました、丁度大盡の高樓と向ひ合うやうに大工を入れて櫓を高く組み上げさせました。

大盡の方では、その櫓を見ては笑ひ物にしてゐました。それは大盡の家の高樓と、道庵先生が大工を入れて急ごしらへにかゝる櫓とは比較になりません。そんな事をして張合はうとする道庵の愚劣を笑つてゐました。

或日の事、大盡の家の高樓では、大廣間を開放して例の美人連に合

奏をさせ、出入の客を盛んに集めて大陽氣で浮ればじめたのを道庵が見て、外へ飛び出しました。

間もなく道庵が歸つて來た時分には、その背後に二十人ばかりの見慣れない男を伴れて來ました。それは年を取つたのもあれば、若いのもあり、脊の高いのもあれば低いのもありました。道庵は此の廿人ばかりの見慣れない男を櫓の上へ迎へ上げました。さうして彼等に何事をさせるかと思へば、つゞいて其處へ太鼓を幾つも幾つも擔ぎあげさせました。

この連中は、馬鹿囃子をする連中であります。何處から賴んで來たか知れないが、わづかの間に此れだけの馬鹿囃子を集めることは道庵でなければ出來ない事と思はれます。

大盡の家では、琴や三味線や胡弓で、ゆるやかな合奏の興が酣になる時分に、道庵の櫓では天地も崩れよと馬鹿囃子がはじまつてしまひました。それが爲に大盡の樓上の合奏は滅茶々々に破壞されて呆氣に取られた美人連と來客とは忌々しさうな面を見合せるばかりでありました。

それを得たりと道庵先生は囃子方を勵まし立て。自分は例の潮吹の面を被つて御幣を擔ぎながら櫓の眞中で、これ見よがしに踊つて踊つて踊り拔きました。

道庵先生の潮吹の踊りは、たしかに專門家以上であります。これまでに踊りこなすには道庵も多年苦心したもので、藝も熟練してゐる上に、自分が本心から興味を以て踊るのだから、潮吹が道庵だか、道庵が潮吹だかわからない位に妙境に入つてゐるのであります。

合奏の興を破られて敵意を持つてゐた大盡の高樓の美人連や來客も

道庵先生の踊りぶりを見ると、敵ながら感服しないわけには行かないのであります。

道庵の屋根の上ではその都度々々馬鹿囃子がはじまります。馬鹿囃子がはじまると、鰡八大盡の妾宅は滅茶々々にされてしまひます。鰡八は道庵風情を相手に喧嘩をすることを大人げないと思つてゐますけれども、あんまり無茶な事をするものだから腹に据ゑかねて、幾らかゝつても宜いから道庵を退治するやうに出入の者に内命を下しました。

一方、道庵の方では馬鹿囃子が當りに當つたものだから、いよ〳〵宜い氣になつて、此の頃では、道庵も本業の醫者を其方退けにして踊り狂つてゐました。さうするとまた近所界隈が其れを面白がつてワイ〳〵と集まつて來ました。遂には道庵先生の庭から屋敷の前まで露店が出て物日縁日のやうな景氣になりました。

鰡八大盡の妾宅の喧しい事と云つたら、それが爲に夜の目も寢られないのであります。大盡から内命を下された出入の者は、如何にして此の暴慢なる道庵を退治すべきかに肝膽を碎きました。その結果如何しても、右の馬鹿囃子に對抗するやうな景氣をつけて道庵の人氣を壓倒しなければならないと、その方法を色々と研究中でありました。

その間、道庵は、いよ〳〵圖に乘つて此れ見よがしに踊り狂ひ、踊りながら、

『スッテケテンツク、ボラ八さん』

なんぞと妙な節をつけて出鱈目の唄をうたひました。それがまた子供達の間に流行つて、

『スッテケテンック、ボラ八さん』

何も知らない子供たちは、道庵の眞似をして大きな聲で町の中を唄つて歩くやうになりました。

大盡の一味の者は、いよ〳〵安からぬ事に思ひ、遂に大きな園遊會を開いて道庵を壓倒するの計畫が出來上りました。

その計畫は、さすがに大きなものでありました。天下の富豪たる鰡八大盡が、費用を惜しまずにやる事ですから、トテモ十八文の道庵などが比較になるものではありません。

其の園遊會の餘興としては決して馬鹿囃子のやうなものを選びませんでした。その頃の名流を擇りすぐつた各種の演藝の粹を拔いて番組をこしらへました。また主人や出入の者も各々腕に撚をかけて其の隱し藝を發揮しやうといふ事でありました。その上に、その頃、

朝鮮から來てゐた名代の美男子の役者がありました。それに非常な高給を拂つて朝鮮芝居を一幕さし加へるといふ事などは、作者が可なり腦髓を絞つての計畫でありました。

これ等の計畫や、撰定が、すつかり定まつてしまうと、それを成るたけ大袈裟に世間に觸れてもらはねばならぬ必要から、人に金をやつて、散々に吹聽させ、お太鼓を叩かせたものですから、この度の園遊會の景氣は長者町界隈は愚か江戸市中までも鳴り響きました。

『さすがに大盡の威勢は大したものだ、すばらしい御馳走をした上に、日本の土地では見ることの出來ない朝鮮芝居を見せてくれるさうだ、鰡八大盡でなければ出來ない藝當だ、さすがにする事が大きい』

江戸市中は此の評判で持ち切つてしまひました。道庵の馬鹿囃子な

どは此の人氣に比べると、お月樣に螢のやうなものでありました。道庵も少しばかり悄氣て來ました。これは馬鹿囃子だけでは追付かない、何か外に一思案と思つてゐるうちに、大盡の屋敷の園遊會の當日となりました。

江戸市中の見物は我も我もと押しかけて來ましたけれど、大盡の妾宅の門まで來て見ると急に二の足を踏んでしまひました。

それは園遊會も朝鮮芝居も無料で接待するものとばかり思つてゐたら、日玉の飛び出るほど高い場代を徵集するのでありました。それで集まつたものが、あつと二の足を踏みました。

あれほど吹聽したり評判を立てさせたりしたものだから、無料で入れて無料で見せるのだらうと思つたら、目玉の飛び出るほどの場代を取るといふのだから、集まつて來た人が門の前で二の足を踏みました。

『馬鹿にしてやがら、大盡が如何したと云ふんだい、鰯八が如何したんだい』

と云つて惡態をつくものもありました。併し其れは惡態をつく方が間違つてゐるのであります。大盡だからと云つて、この廣大な園遊會を開き、それから非常な高給を拂つて朝鮮役者を招くからには、その位の場代を取ることは少しも無理はないのであります。無理は無いのみならず、日本では、ほとんど見ることの出來ないと云はれた朝鮮芝居を、斯うして其儘持つて來て居ながらにして見せて呉れるといふことは、並大抵の興行師などでは出來ない事であります。それですから、見物は大盡の威勢と恩惠とに感涙を流して場代を拂はなければならないのであります。それを無料見やうなどゝいふの

は如何にもさもしい事であります。併し、江戸兒にも、さうさもしいものばかりは有りませんでした。塲代が高いと云つて、後込をしてこの珍らしいものを見ないで歸るのは、たしかに江戸兒の估券に觸ると力み出すものが多くありました。江戸兒の腹を見られて朝鮮人に笑はれても詰まらねえと、國際的に氣前を見せる者もありました。それが爲に一旦、二の足を踏みかけた見物が、見す〳〵目玉の飛び出るほど高い塲代を拂つて門の中へ入り込むと、人氣といふものは オカしなもので、遂には我も〳〵と先を爭つて切符を買うやうな景氣になつて門内へ雪崩込むのでありました。

さすがに鰡八大盡のすることは、こんな些細な事までも違つたものであります。道庵などは貧乏人の癖に身錢を切つて馬鹿囃子を雇ひ家業を其方のけにして騒いでゐるのに、大盡は大評判を立てた上にこんな事でも充分に算盤を取れるやうにするのだから、どの道相撲にはなりませんでした。併し、これは鰡八が豪いといふよりも、お附の作者や狂言方の仕組が上手なので、それが爲に一段と大盡の器量を上げたと云つた方がいゝのかも知れません。

この園遊會も餘興も朝鮮芝居も 悉く大成功でありました。その日一日でおしまひといふわけではなく、當分の間、毎日つゞくのでありました。市中一般に於ては、これを見なければ、話にならいから毎日々々〳〵續々と詰めかけて來ました。日のべを打てば打つほど儲かつた上に評判が高いのでありますから、鰡八の御機嫌も斜ではないし、お出入の人々も恐悦に感ずるし、作者や狂言方のお覺えも結構なものであります。

こゝに哀れをとゞめたのは道庵先生で、折角、圖に當つた馬鹿囃子は、この園遊會と朝鮮芝居の爲に、すつかり壓れてしまひました。隣からは毎日々々、この景氣で見せつけられてゐるのに、もう馬鹿囃子でもなし、さうかと云つて、それに對抗するには上野の山内でも借受けて和蘭芝居の大一座でも買ひ込んで來なければ追着かないのであります。それは先生の資力では、トテも追付かない事であります。

道庵は其れが爲に苦心慘憺しました。自分の智惠に餘つて、子分の者を呼び集めて評定を開いて見ましたけれど、いづれ、道庵の子分になる位のものだから、資力に於ても智惠袋に於ても、そんなに芳ばしいものではありませんでした。

いよ〳〵大盡に打着かる手術が無ければ最後の手段は、先生が口癖に云ふ毒を飲ませる事のみだが、口にこそ云ふけれど、此の先生は毒を飲ませて人を殺すやうな、そんな毒のある人間ではありません。

二

こゝにまた前に見えた「貧窮組」の事に就て一言しなければならなくなりました。貧窮組といふのは一種の不得要領な暴動でありました。明治六年の出版にかゝる「近世紀聞」といふ本に、その時代の事を此んな風に書いてあります。

是より先、米價次第に沸騰して既に大阪市中にては小賣の白米一升に付代錢七百文に至れば其日稼の貧民等は又如何とも詮術なく殆ど飢餓に及ばんとするにぞ、九條村且つ難波村など所々に多人

數寄集まり不穩の事を談合して始めは市中の搗米屋に至り低價に米を賣るべしとて僅の錢を投げ出し店に積たる白米を理不盡に持行くもあり或は代價も置かずして俵を奪ひ去るもあれど多人數なる故米商客も之を支ゆる事を得ず斯の如くに横行して大阪中の搗米屋へ至らぬ隈もなかりしが果はます〳〵暴動募りて術よく米を渡さぬ家は打毀しなどする程に市街の騒擾大かたならず、這は只浪花のみならず諸國に斯る擧動ありしが、就中江戸に於ては米穀其他總ての物價又一層の高料に至れば貧人飢餓に耐ざるより或は五町七町ほどの賤民おの〳〵黨を組て身元かなりの商家に至り押て救助を乞はんとて其町々に觸示し倘其の黨に加はらざるは金米その他何品にても救助の爲に出すべき旨强談に及ぶにぞ勢ひ已を得ざるより身分に應じ夫々に物を出して施すもあり力及ばぬ輩は餘儀なく黨に加はるをもて乍ち其の黨多人數に至り軈て何町貧窮人と紙に書いたる幟をおし立、或は車なんどを曳いて普く府下を横行なし所々にて救助を得たる所の米麥又は甘藷の類ひを件の車に積、もて歸りて便宜の明地に大釜を据ゑ白粥を焚きなどするを貧民妻子を引連れ來りて之を爭ひ食へる狀は宛然蟻の集まる如く蠅の群がるに異ならで哀れにも最淺間しかり、されば一町斯の如き擧動に及ぶを傳へ聞けば隣町忽ちこれに慣らひ遂に江戸中貧民の起り立たざる場所は尠く……云々」

これによつて見ると「近世紀聞」の記者は、貧窮組を蟻の集まる如く蠅の群がるに異ならずと見たのであります。貧民といへども人間であらうのに、其れを蟻や蠅と同じに見られたといふことは不幸であります。

けれども蟻や蠅に見立てられる貧民自身に取つては、必ずしも物好でやつた事ではないらしいのであります。彼等にあつては天下が徳川のものであらうと、薩長の手に渡らうと其んな事は大した心配ではありませんでした。たゞ心配な事は物が高くなつて食へなくなるといふ事でありました。

天下國家の大きな事を憂ふる人には、別に志士といふ一階級があつて、それは殿様から代々御扶持をいたゞいて、食うといふやうな賤しい事には別段の心配の無かつた者や、その家庭に生ひ立つた人が多いのであります。けれども此の貧窮組は生え抜きの平民でありました。武士は食はねど高楊枝といふやうな事を云つて居られぬ身分の者ばかりでありました。彼等は食ひたくて堪まらないのであります。世に食ひたくて堪まらないものが食へなくなるといふことほど怖るべき事實はないのであります。蟻や蠅でさへ生きてゐられる世の中に、人間が食へなくなつて生きてゐられないといふ世の中は無惨なものでありました。

それが爲であつたか如何か知れないが、あの不得要領な貧窮組が勃發して江戸市中を騒がすと共に、有司も金持も不得要領に驚いてしまひしました。殊に驚いたのは金持の連中でありました。一時は生きた空がなくて、金品を寄附したり慈善會のやうなものを起したりして、貧民の御機嫌を取らうとして見た狼狽方は可なり不得要領なものでありました。けれども其れは誠意のある狼狽方ではなく不得要領はいよ〳〵以て不得要領な狼狽方でありました。

けれども其の時分の政治は打てば響くやうな政治ではありませんでした。徳川幕府が亡びかゝつた時代の政治でありました。

米が高くならうとも物價が上がらうとも幕府の方では、あんまり干渉をしませんでした。いよ〳〵の時までは成行に任せて置いて、何か出たら出た時の勝負といふやうな政治でありました。

金持の連中も亦、儲けたい奴は盛んに儲け、儲けた上に莫大の配當をしました。さうして大ビラで贅澤や僭上の限りを盡しました。蟻や蠅なんぞは踏みつぶして通る勢でしたけれども、その蟻や蠅が多數を組んで、あばれ出して見ると、唇の色を變へて周章狼狽した有樣は滑稽にも亦不得要領の現象でありました。

さすがに緩漫主義の幕府も、斯う騷ぎ出されて見ると、手を束ねてばかりは居られませんでした。同じ「近世紀聞」といふ本のうちに、

其頃既に庄内藩には府下非常を誡めのため常に市中を巡邏あり且南北の町奉行にも這回の暴擧を鎭撫なさんと自ら駕兵を從へつゝ

普く市街を立廻りて適宜の處置に及ばんとするに貧民は早や食うと食はぬの界に臨みたるなれば各死憤の勢ありて小吏等萬般說諭なせども、辻々に鎭まらず、或は淺草今戸町その外處々の貧窮人等が張札をして區々の苦情を演たるうへ、先づ差當り白米の代價百文に付五合ならねば窮民口を糊し難しと記し、また或は米穀は固より諸色の代價速かに引下ぐるにあらずんば乍ち市中を燒拂はんなどと書裁なしたる所もあり、斯なして尙貧民等は市街を横行なせる事は日を追つて熾なりしが其頃品川宿に於て施行を出すを左右と拒みたる者ありとて乍ち其家を打毀せしより人氣いよ〳〵荒立て澁りて物を出さぬ家は會釋もなく踏込て或は舖をうち毀し家内を亂妨に及ぶにぞ蓄財家は皆戰慄て家業を休み店を閉めて只亂妨の防ぎをなせば貧窮人のみ勢ひを得て道路に

立て威を震ひしは實に未曾有の珍事なりけり……さる程に貧人の暴動斯くの如くなれば庄内侯の巡邏方且つ町奉行の手を以て其の發頭人なる者を迫々捕縛なしたりしかど、もとこれ、米價の沸騰より飢餓に逼るに耐へかねて、かゝる擧動に及べるなれば兎に角是等を救助せずして靜まるべきの筋にあらずとて、先づ救民小屋造立の間、本所回向院、谷中天王寺、音羽護國寺、三田功運寺澁谷澁谷寺の五ケ寺に於て炊出しを命ぜられ普く貧民に之を與へ其うち神田佐久間町の廣場に小屋を設けられて至極の貧人を救助せしかば是にて府下の騷擾も稍鎭靜に及びたり。

幸にして此の貧窮組は、それだけの騷ぎで鎭まりました。大鹽平八郎も出ないし、レニン、トロツキーも出ないで納まりました。たゞ〳〵道庵先生あたりが飛び出してお茶一服を差加へたやうな事で、兎も角も納まつたのは國家の爲に大慶でありました。

表面、この騷ぎは納まつたけれども、それの根本が絶たれたといふわけではありません。一時は震え上つた富豪達が、あはてふためいて貧民の御機嫌を取つて見たけれど、表面の暴動が過ぎ去つてしまへば、あとはケロリとして忘れたものゝやうに、書畫骨董に馬鹿げた金を出したり、巫山戯きつた集まりをして見せたり、無用の建築をして見せたり、そんな事で以前よりは一層の太平樂を露骨に見せるやうになつたのは困つたものであります。

それと共に、一時の雷同に出でないで、心ひそかに此の世の有樣を觀察し或は憤慨してゐる者が漸く多くなつて行きました。

本町一丁目の自身番へ、眼の色を變へて飛び込んだのは、いつも粗

忽かしい下駄屋の親父であります。

『大變だ』

と云つて其の親爺は息を切りました。この男の粗忽かしいのは今に初まつた事ではないけれど、今日は眼の色が變つてゐるだけに、それから貧窮組の騒ぎが納まつて間もない時であるだけに、其處に集る親爺連の胸を騒がせて、

『如何なすつた』

種彦の合卷物を讀んでゐた親爺も、碁と將棋をちやんぽんにやつてゐた親爺も、それの岡目をしてゐた親爺も、晝寢をしてゐた親爺も其處に集る親爺といふ親爺が、皆んな下駄屋の親爺の大變だといふ一聲で驚かされました。

一體こゝへ集る親爺連は可なりいゝ氣なものでありました。外は往來の劇しい本町の眞中で、こゝは閑々たる別天地、半鐘がヂャンと打つからない限りは他人の來る氣遣ひはない處で、これ等の親爺連の心配になることは、夕飯を蕎麥にしやうか、それとも鰻飯とまで奮發しやうかといふやうな心配でありました。鰻の序に酒の隱れ呑もしなければならないといふやうな心配でありました。その閑々たる空氣を下駄屋の親爺が破つて云ふ事には、

『外へ出て御覽なさい、大變な物だ、そこの雨樋筒に生首が一ッ……』

『ヱ』

『嘘だ〳〵』

『冗戯じやねへ、善兵衛さん、貧窮組が納まつて間も無え時だ、嘘かしつこなし』

『生首は嘘だが、まあ外へ出てごらんなさい、大變な張紙だ』

『エ、張紙』

張紙と聞いてやゝ安心をしました。やゝ安心したけれど、それは生首と聞いた時よりも安心したので、此の時分の張紙は、生首と聞くのと、ほゞ同じやうに氣味の惡いものでありました。親爺連は折角の興を殺がれたけれど、また別の興味を持つて外へ出たり、外を覗いたりして見ると、其の自身番の北手の雨樋筒に大きな張紙がしてあつて、其れを通りがゝりの人が大勢して讀んではワイ〳〵騷いでゐるのでありました。

『また、此んな惡戯をはじめやがつた、人騷がせな惡戯だ』

と自身番の親爺はブツ〳〵云ひながら其の張紙を引ぺがしにかゝりました。自分も讀まないうちに成るべく早く引ぺがして町奉行にお屆けをする方がよいと思つて、邪慳に其れを引ぺがして自身番の中へ持ち込んでしまつたから、見物の中には一讀したものもあらうし、まだ讀みかけて半のものもあつたらうしこれから讀もうと思つてゐた者もあつたのが、一同鳶に物を浚はれたやうな氣持になつて、自身番へ持込んだ親爺連の後を恨めしげに見送つてゐること暫時、幸に大した騷ぎにはならずに散つてしまひました。

自身番の内部へ其の張紙を持ち込んだ親爺連、額を集めて眼の敵のやうに其れを讀みはじめました。其の文言は却うであります。

絲會所取立所

三井八郎右衛門

其外組合の者共

此者共、めい〳〵世界中名高き巨萬の分限にありながら、足るこ

とを知らず、強慾非道限り無き者共、身分の程を顧みず報國は成らずとも、皇國の疲勞に相成らざるやう心掛くべき所、開港以來諸品高價のうちには、絲類は未曾有の沸騰に乘じ、諸國絲商人共へ相場狀にて相進め、頻りに横濱表へ積出させ候につき、絲類悉く拂底高直に成り行き萬民の難澁少からず、畢竟此の者共、荷高に應じ、廣大の口錢を貪り取り候慾情より事起り、皇國の疲勞を引出し、一己の利に迷ひ、他の難澁を顧みず、不直の所業は權家へ立入り賄賂を以て奸吏を暗まし、公邊を取拵へ、口錢と名付け、大利を貪り、奸吏へ金錢を差送り、絲荷を我が得手勝手に取扱ひ、神奈川關門番人並に積問屋共へ申合せ、所謂世話料受取り、荷物運送まで荷主に拘はらず自儘取扱ひ、不正の口錢貪り取候事、右絲會所取立三井八郎右衛門始め組合の者他の難儀を顧みず、非道にて所持の金錢並に開港以來貪り取る口錢廣大の金高につき、今般殘らず下賤困窮人共に合力の爲配當つかはし申すべし、若し慾情に迷ひ其儘捨て置かば組合の者共一々烈風の折柄天火を以て降らし、風上より燒立て申すべく、其節に至り隣町の者共火災差起り難澁に之れ有るべく候間前記會所組合の者共名前取調べ置き、類燒の者は普請金並に諸入用共存分に右の者より請取申すべく且火災差起り候はゞ困窮の者共、早速駈付彼等貯へ置き候非道の財寶勝手次第持ち去り申すべく、右の趣前以て示し置き候間、一同疑念致すまじき事。

これだけの事を自身番の親爺のうちでも、讀むことの達者な眼鏡屋の隱居がスラ〳〵と節をつけて讀み立てました。

下駄屋の親爺は面白さうに聞いてゐました。質屋の隱居は不安心ら

しい面をして聞いて居ました。

『何しろ、事が穏かでごわせんな』

と質屋の隱居は、いと〻不安心の色を深くしました。

『はゝゝゝ、三井さんも、いよ〳〵やられますかな』

下駄屋の親爺は、やはり面白半分に深くは問題にしてゐないらしくありました。

『ナニ、やる奴に限つて先觸は致しませんな、たゞほんのイタヅラでございますよ、嚇かしに過ぎませんよ』

寢ころんで種彦を讀んでゐた親爺が、やゝ遠くから言出しました。

『さうも云へませんせ、人氣のものですからワーッと騷ぐと、何をやり出すか知れたものではございませんせ、本所の相生町の箱惣なんぞが其れでございますからな、首を刺されて兩國橋へ曝されて、やつ

ぱり此の通りの張札をされたんでございますからな』

眼鏡屋の隱居は其れに答へました。

『あゝ、鶴龜、鶴龜、其んな話は御免だ』

と質屋の隱居は氣を惡くしたと見えて、煙草入を腰に挾んで立ち上がりました。折角今まで碁を打つてゐたのに、それを早々逃げ腰になつた處を見れば、この親爺連のうちでは、質屋の隱居が一番弱蟲であることがわかります。

質屋の隱居が逃げ出したあとで、人々の噂によれば此の隱居も、實は張札の絲では組合に入つて大分儲けてゐる側だとの事でありました。この次に來たら嚇かして奢らしてやらずばなるまいなんぞと、後に殘つた親爺連はいろ〳〵評定してゐました。

斯樣な張札は此の頃の流行り物とした處で此れは餘り物騷過ぎる、

このまゝでは捨てゝ置けないから自身番の親爺連は、これを町奉行の手へ届ける事に評定を定めて、二三人の總代が其れを持つて表へ出ました。

表へ出た處へ、折よく町奉行の手に屬する見廻りの役人が此の自身番へやつて來ました。それを幸に總代は、

『實は斯樣な次第でございまして斯樣な張札が……』

役人は其れを聞いて見て一通り讀んで後、

『この筆蹟は……』

と首を傾げました。

その張札を町奉行へ持つて來て、その筆蹟を彼此と評議をして見た處が、それが道庵の文字に似てゐるといふことが至極迷惑な事でありました。

長者町の名物としての道庵は、貧窮組と聞いて、喜んで演說まつたけれども、それは至極穩健な演說で、貧窮組にも同情を寄せるし、物持連中にも成るべく怪我をさせないやうにとの苦心をしたものでありました。

道庵は此んな張札をする人物でないといふ事はお上の役人にも、よくわかつてゐるけれど、其れにしても此の筆蹟が道庵ソックリの筆蹟でありました。これはイタヅラ者が、わざと道庵の筆蹟を眞似て書いて、あとを晦ましさうとした手段であることは明かだけれど、それが爲に善い迷惑を蒙つたのは道庵先生であります。殊に此の頃は鰡八大盡と楯を突き合つてゐる時でもあるし、よし、これは道庵が書かないにしても、道庵に知合のもの、道庵の許へ出入する者の仕業ではないかと、目を着けられるやうになつたのが可哀相でありま

す。

三

甲斐の國の八幡村の水車小屋附近で若い村の娘が慘殺されて村を騷がした後、小泉家には机龍之助もお銀様も其の姿を見ることが出來なくなりました。

二人は何處へ行つたか、その入つて來た時と同じやうに、此の家を去つたのも、誰も知るものはありませんでした。これを想像するに或は一旦、甲府へ歸つて、また神尾主膳の下屋敷にでも隱れるやうになつたものかも知れません。或はまたお銀様の望み通りに、江戸へ向けて姿を晦ましたものかも知れません。兎に角、八幡村には、

この二人の姿は見えないのであります。

或人は、また夜陰、小泉家から出た二挺の駕籠が、惠林寺まで入つたといふことを見屆けたといふものもありました。併し、小泉家と惠林寺とは、常に往來することの珍らしからぬ間柄でありましたから、それを怪しむ心を以て見屆けたのではありません。

駒井能登守去つて以來の甲府は神尾主膳の得意の時となりました。けれども其得意はあまり寢ざめのよい得意ではありませんでした。心ある人は主膳の得意を爪彈きしてゐました。主膳自らも、この頃は、酒に耽ることが一層甚だしくなつて、酒亂の度も追々嵩じて來るのであります。酒亂の後には二日も三日も病氣になつて寢るやうなことがあります。

主膳は執念深くも、能登守がお君といふ女をどの樣に處分するかを

注目し、手討にしたといふ評判を聞いた後も其の注目をゆるめることなく、その後向嶽寺に見慣れぬ尼が送り屆けられてゐるといふことを聞いて、途中で其の女を奪ひ取らせやうとしました。

お松が神尾の屋敷を脱け出したのは其の間の事でありました。向嶽寺から出た乘物を奪はせやうと計つた事が散々の失敗に終つたといふ報告も同時に齎されたが、それと聞いて何とも云はずに苦笑ひして、寢込んでしまつたのも其の時分の事です。

甲府城内の暗闘とか勢力爭ひとかいふ事は其れで一段落になりました。

別家にゐるお絹といふ女に取つても、此の頃は同樣に荒んだ有樣が屢々と見えます。出入の誰彼との間に、色々と良くない噂が口に上るやうになりました。或ひは當主の主膳と此のお絹との間柄をさへ疑うものが出て來るやうになりました。

其れ等の不快や不安を紛らはす爲か如何か知らないが、神尾を中心として酒宴を催される事が多くなり、お絹も亦、その別家へ人を招いては騷々しい興に夜の更くることを忘れるやうな事が多くありました。それから勝負事は一層烈しくなり、お絹までが勝負事に血道を上げるやうになつてしまひました。

此の頃のお絹は自宅へ男女の客を招いては勝負事に浮身をやつしてゐます。

或時は思ひがけない大金を儲ける事もありました。或時は大切の頭飾りなどを投げ出すやうな事もありました。

興が盡きて客が去つたあとでは、何だか堪らないほどな淋しさを感ずるやうになりました。その淋しさを消す爲に冷酒を煽るやうな事

もありました。遂には毎夜冷酒を煽らなければ寝つかれないやうになつてしまひました。

お松がゐれば此れほどにはならなかつたものであります。お絹は兎も角もお松を保護してゐました。お松も亦何のと云つても恩人として其の人に忠實でありました。だからお松があることによつて、何となしに前途に希望を持つてゐましたけれど、其のお松が逃げてしまつて見ると、頼む木蔭の神尾の當主といふのは、此の通りの人物であるし、自分は年漸く更けて容色は日に〳〵凋落して行くし、さうかと云つて、頼るべき親類も、力にすべき子供もないのであります。それを考へると前途は絶望あるのみでありました。足許の明るいうち、また故郷の濱松へ舞ひ戻らう。

お絹は斯うも思慮を定めました。併し故郷へ引込むには引込むやうにしなければならないと思ひました。先立つものは金であります。その金が全く思ふやうにならぬ時分に、こんな思慮を定めた事は不幸であります。

『金が欲しい、お金が欲しい』

お絹は痛切に其の事を考へました。それがお絹をして一層勝負事に焼けつくやうにさせてしまひました。

處が其んな場合に於ける勝負運は皮肉なもので、勝ちたいと思へば思ふほど負け、焦せれば焦せるほど喰ひ違つて行くのであります。

お絹は身の廻りの、ほとんど總ての物を失つてしまひました。借りるだけの信用のある金は借り盡してしまひました。

今夜も、お絹は堪らなくなつて、隠して置いた冷酒を茶碗に注いで飲まうとする時に、本邸の方で大きな聲で罵るのが聞え出しました。

それは紛れもなき主人の神尾主膳が酒亂の爲に人を罵つて居るのでありました。

それを聞きながら、お絹は、また一杯の冷酒を茶碗に注いで口の處へ持つて行つたけれど、其れは苦いものゝやうでありました。

『お絹殿、お絹殿』

呂律も廻らない聲でお絹の名を呼びながら、庭下駄を穿いて此方へ來るらしいのは正しく酒亂の神尾主膳の聲であります。

此の頃では神尾が酒亂になつた時には、誰も皆逃げてしまひます。誰も相手にしないで罵るだけ罵らせ、荒ばれるだけ荒ばれさせて、その醒める時まで抛つて置くのであります。

相手のない酒亂に拍子抜けのしたらしい神尾主膳は、何を思ひついたか、お絹の住む別宅の方へ押しかけて來るらしいのであります。

其の聲を聞くとお絹は淺ましさに身を震はせました。

幸にして神尾主膳は境の木戸を開かうとして、其の錠の嚴しいのに飽んだものか、取り止めもなき言語を吐き散らした上に引き上げてしまつたものゝ樣でありました。

お絹はホッと息を吐きましたけれど、苦悶の色が面に滿ち渡るのを隱すことが出來ません。

四

氣の毒なのは駒井能登守であります。江戸の本邸に着いたまでは、兎も角も其の格式で歸りました。

江戸へ着いてから幾何もなくして其の姿をさへ認めたものはありま

せん。番町の本邸は鎖されて朽かゝつたけれど、新しい主を迎へる模様は見えませんでした。

此れより先き、病氣であつた夫人は親戚の手に奪うが如く引き取られてしまつたといふ事です。家來の者は四分五裂です。

主人の能登守は自殺したといふ噂もあるし、遠國へ預けられたといふ噂もありましたが、たゞ其の噂だけで誰も一向に其の消息を知つた者はありません。

餘りといへば此れは脆い話であります。器量といひ學問といひ、殊に砲術にかけて並ぶ者がないと云はれた人であります。未來の若年寄から老中を以て望みをかけられたほどの若い人才が、ほんの一人の女の爲に身を誤つたとすれば惜しみても餘りあることであります。

失敗や蹉跌は男子の一生に無いことではありません。事によつては

其れが却つて後日大成を爲す苦き經驗であることも少くはありません。

けれども能登守の此の度の失敗ばかりは到底取り返すことの出來ない失敗であります。能登守といふものは此れで全然社會から葬られてしまつた結果になりました。能登守自身が葬られてしまつたのみならず、遠くは其の祖先の名も、近くは其の親類の名も、これによつて泥土に汚されたと同じやうな結果になつてしまひました。

一死よりも名譽を重んじ、一命よりも門地を尙ぶ慣習の空氣に生立ちながら、見す〳〵斯ういふ事を仕出かした能登守には魔が附いたと見るより外はないのであります。それほどの馬鹿でも無かつた筈の人が、これより上の恥辱は無いほどの恥辱を以て生きながら葬られたことは、人事ながら淺ましさに堪へられないほどの事であります

す。

それでありながら立派に腹も切れないとは、よく〳〵腰が抜けたものだと憤慨する人や、こゝで腹を切つたら其れこそ恥の上の恥の上塗りだと冷笑する者や、それ等の空氣の間で、駒井家は見事に沒落して、其の空屋敷の前を通りかゝつた者でもなければ、もう噂をいふ人も無いといふ時分になつてしまひました。

その時分に王子の瀧の川の甚兵衛といふ水車小舍の附近へ公儀から役人が出向いて繩張りがはじまりました。何か目的あつて此の土地へ建前をするものゝやうに見受けられました。殊に其れは川に沿うて水の流れを利用するらしい計畫でありました。

土地の人も、最初は何の目的の繩張りであるかを知りませんでした。程なく同地の扇屋を旅館として身分ある公儀の役人が詰た時に、其

の繩張の計畫が可なり重大なものであることを悟りました。其處へ來た役人の重なる者は澤太郎左衛門と武田斐三郎とでありました。

この二人は幕府の其の方面に於て輕からぬ地位の人でありました。扇屋へ招かれた大工の伊三郎だの爲の萬藏だのといふ者の口から聞くと、此の度のお繩張りは瀧の川附近へ公儀で火藥の製造所をお建になる御目論見から出たものだといふことがわかつて來ました。

この火藥の製造所は、從來の火藥の製造とは違つて、日本に於て初めての西洋式の火藥の製造所を建てるといふことなのであります。

その計畫は小栗上野介と武田斐三郎との兩人の企てゞ澤太郎左衛門が其れに參加したのは、やゝ後の事になります。

斯うなつて來ると思ひ出されるのは、それにもう一枚、駒井能登守といふ事でありますが、惜い哉、折角の人材も烏有のうちに葬られ

てゐます。

この日本で初めての西洋式の火藥の製造所の工事は着々と進んで行きました。

最初に繩張りをした甚兵衛水車の附近は水量が不足だからといふ理由で三ッ又の方へ持つて行かれました。

工事の頭取には武田斐三郎、それを助けるのは御鐵砲玉藥下奉行の小林祐三、外に俗事役が三人と、其の頃算術と舍密學に通じてゐた貝塚道次郎といふものが手傳ひに出勤することゝなりました。

注文の火藥製造機械は和蘭のアムステルダムから帆前船に積み込まれたといふ通知もありました。

頭取をはじめ役人達は扇屋を宿と定めてゐたけれど、工事の場所には作事小屋があつて、其處に絶えず宿直をしてゐる役人らしい者

がありました。

その小屋の一室へは武田斐三郎や貝塚道次郎等が出入するのみで、他に何人も出入することを許されませんでした。それは、人に知られてはならない火藥上の秘密や機械類の組立をする處であらうと、俗事役の者や土方工夫などは、敢て其に近寄らうとはしませんでした。

この秘密室は夜になると嚴重に錠が下ろされてしまひます。工事の見守りをする夜番の小屋は其處よりズッと隔つた處にあるから、たゞ時々に其の邊を廻つて火の用心をする程に過ぎませんでした。この火藥の製造所を計畫した小栗上野介は一種の人傑で、幕府に於ての主戰論者の第一人でありました。勘定奉行にして陸海軍奉行を兼ね、勝も大久保も皆其の配下に働いたものであります。この火藥の

製造所とても、西の方に起る大きな新勢力に對する用意の一つであることは申すまでもありません。王政維新を叫ぶ西の方の諸藩の人に取つて、此の火藥製造所の計畫が尋常のものとして見過ごされないのは當然であります。

この工事に入つてゐる土方や人足にも相當の吟味をして入れなければならない筈なのが、如何したものか、少くとも、たつた一人だけ穩かでない人足を入れてあることは、役人達の大きな手落と云はうか、それとも其の一人が變裝と素性を隱すことの巧な爲と云はうか兎に角、其の土を擔いだり、石を運んだりする人足のうちに、氣を付けて見れば、其れと氣のつけらるべき男が一人あります。

それは甲府の破獄以來の事を知つたものには指して云ひさへすれば直ぐにわかる事なので、あの時、牢屋を破つた主謀者、後に偶然駒井能登守邸に隱まはれた奇異なる武士、また甲州街道では馬を曳いてがんりきを追ひ飛ばした馬子、ここでは土を擔いだり石を運んだり樣々に變幻出沒するけれど、要するに同一の人で、あの時南條といはれて通つた浪士らしい男であります。

繩張外に立てられた土方部屋を夜中に密と拔け出して手拭をかぶりつゝ、作事小屋の方へ忍んで行くのも其の人であります。何處へ何の目的あつて行くのかと思へば、柵を乘り越えて作事小屋の中へ足を踏み込みました。

工事の頭取と公儀の重役とが秘密に會議をする作事小屋の一室——そこを目ざして此假裝の勞働者は忍んで行くものゝ如であります。この男が秘密室を探らうとするのは、今夜に始まつた事ではないのであります。

毎夜のやうに其の邊を探らうとして忍ぶものらしいが、いつも其の目的を達せずして歸るものゝやうであります。今宵も亦其の通りで空しく工夫部屋まで引き返したのは、やはり例の秘密室の構造が嚴重なのか、或は中にゐる人の用心が周到なので近寄れなかつたものと見えます。

さうしてゐるうちに此の火藥製造所の工事は進んで行くのであります。右の南條と覺しき奇異なる勞働者は相變らず毎日石を運んだり土を荷つたりして、他の勞働者と同じことに働いてゐるのであります。

硝石の精製所も出來ました。硫黄の蒸溜所も出來上りました。機械類の磨き方は鐵砲師の川崎長門と國友松造といふ者が來て引受けました。水壓器の組立も出來ました。

その都度、右の勞働者は、役人や仲間のものゝ氣のつかないうちに家の建前と機械類の構造を注意することは驚くべき熱心さでありました。熱心でさうして機敏でありました。人に氣取られやうとする時は、何かに紛らかして、何食はぬ面をしてゐる濟まし方などは、其のつもりで見れば驚くべき巧妙さでありました。

夜になつて人の寢靜まつた時分には、それ等の見取圖を頭の中から吐き出して紙に寫してゐることも、誰にも知られないで進んで行きました。紙に寫した見取圖は工夫部屋の椽の下を掘つて埋めて置くことも、誰にも見つけられないで納まつて行きました。埋めて置いてから例の通り疑問の秘密室の方へ出かけるけれども、其處ばかりは如何しても近寄ることが出來ないらしくあります。近寄る事が出來ても、内部の模樣は如何しても知ることが出來ないらしくありま

す。この奇異なる勞働者が知らうとして知ることの出來ないのは、たゞ右の秘密室の内部ばかりであるやうです。

併し乍ら長い間、間斷なく心がけてゐれば、遂には何物かを得られる機會があるものです。今宵も例の通り秘密室の柵の外まで忍んで水邊の立木の下に、そつと忍んで考へてゐると、その柵の一部分の戸が開きました。

打ち見た處は高い柵でありつたけれど、その下の一部が開き戸になつてゐて、内から押せば開くものだといふ事は今まで氣が着きませんでした。

南條と云はれた奇異なる勞働者は、さてこそと闇の中に眼を見張りました。この人は永らく獄中の經驗があつた爲に暗い處で物を視る力が人並以上なのであります。

そこに南條が隱れて容子を見張つてゐるといふことを知らないらしい中なる人は、戸を開けると、スツクと外へ身を現はしました。それを一目見た時に南條は直に見覺えのある人だといふ事がわかりました。まだ年若き侍體の者であることは誰が見てもわかる事でしたけれど、その若い侍體の人柄に見覺えがあることから、南條は凝と立つて動きませんでした。

この人の外へ出ると、開き戸が内から閉ざされてしまつた事を見ると、内にも慥に人がゐることに違ひないのであります。

内から出た人は小橋を渡つて木立の深みへ身を隱しました。この人を遣り過ごして中なる秘密室の構造に當つて見やうか、それとも此の人のあとをつけて、其の行先を突留やうかと奇異なる勞働者は思案をするものゝやうでありましたが、其の思案は後の方のものに止

まつたらしく、出て行く人のあとをつけて、木立の深みへ入りました。人影は權現の社の方を目ざして歩みを運ぶものゝやうであります。

『其處へ行くのは宇津木ではないか』

火藥の製造所をやゝ離れてから後に呼ぶ聲を聞いて、前に進んで行つた若い侍風の人はハタと歩みを止めました。

『誰ぢや』

闇の中から透して後を顧みた處へ、

『おれだ、南條だ』

と云つて慣々しく近寄つて來たので、

『おゝ』

と云つて前なる人は驚きと安心とで立つて待つてゐました。呼ばれた通りこれは宇津木兵馬でありました。

『久し振だつた、久しぶりにまた妙な處で會つたものだ』

目の前に立つたのは、甲府の牢内にゐる時と、その牢を破つてから後も苦樂を共にした奇異なる武士の南條でありました。

『これは南條殿、全く珍らしい處で、如何してまた此の夜中に、その身なりで』

『それよりも宇津木、君こそ此の夜中に何處へ行つたのぢや』

『ツイ其處まで』

『ツイ其處とは』

『近い處に知り人があつて』

『近い處とは』

『それは、あの』

『いや、隠すには及ばない、君が今、あの火藥の製造所から出て來た處を見かけて拙者は後をつけて來たのだ』

『エ、、それでは見つかつたか、併し、餘人ならぬ貴殿に見つけられたのは心配にならぬ』

『一體、あの火藥の製造所の秘密らしい研究室に隠れてゐるのは彼は誰ぢや』

『南條殿、貴殿はあの人が誰であるかをまだ御存知ないのか』

『知らん』

『それほど鋭いお目を持ちながら、とは云へ、誰にも知られぬが道理、實は外から出入する者は拙者の外に無いのでござる』

『うむ、さうであらう、おれも長らくあの邊に、うろついてゐるが、ツイぞ其の人を見た事が無い』

『判つて見れば何でも無い事、あれはな、甲府に居られた駒井能登守殿ぢや』

『エ、、駒井甚三郎か、それとは知らなんだ、成程、駒井か、駒井ならば彼處に隠れてゐさうな人ぢや、これで萬事がよく飲み込める、さうか〳〵』

南條は幾度も頷きました。

『今も能登守殿の話に貴殿の噂が出た處、貴殿ならば、隠れて居られる能登守殿も喜んで會はれる事と思ふ』

『會つて見たい、さう聞いては今夜にも會つて見たい』

權現社頭から歸つて來たのは駒井能登守であります。今は能登守でもなければ勤番の支配でもありません。一個の士人としては到底世の中に立てなくなつた日影者の甚三郎であります。

例の瀧の川の火藥製造所の秘密室までは無事に歸つて來て、眞暗な室内の卓子の上を探つて、その一端を押すと室内がパッと明かるくなりました。

頭巾を取つて椅子に腰を卸した能登守を見ると、姿も形も大分前とは變つてゐる事がわかります。先づ其の髪の毛を、當時異國人のするやうに散髪にして、眞中より少し左へよつた處で綺麗に分けてあ

りました。それから後の襟へかゝつた處まで長く撫で下ろした髪の末端を鏝を當てたものかのやうに輕く捲き上げてゐました。身につけてゐるのも筒袖の着物と羽織に太い洋袴を穿いてゐました。

此の人としては斯ういふ形をする事も有りさうな事だけれど、其の當時にあつては破天荒なハイカラ姿でありました。この姿をして浮かり市中を歩いて、例の攘夷黨の志士にでも見つからうものならば賣國奴のやうに罵られて其の長い刀の血祭に會ふことは眼に見えるやうなものであります。幸な事に、この人は此處に引籠つてゐるから、此の急進的なハイカラ姿を何者にも見つからないで濟むのでありませう。

能登守――と云はず、これからは駒井甚三郎と呼ぶ、は今椅子へ腰を卸ろすと共に額に泌む汗を拭いてホッと息を吐いて空しく天井を

ながめてゐました。

この室内の模様は、前は甲府の邸内にあつた時と、ほゞ同じやうな書物と武器と、それから別に、洋式の機械類と、藥品等で充滿してゐました。

吐息をついた駒井甚三郎は、やがて兩の手を面に當て卓上に臂をついて俯伏してゐました。それからまた身を起し肱掛に片腕を置いて凝と前の卓上をながめてゐる前には、長さ二尺に幅四寸ほどの小形の蒸汽船の模型が一つ置いてありました。

駒井甚三郎は、その蒸汽船の模型からしばしも眼は放さずに、手はペンを取つて頻りに角度のやうなものを幾つも書いてゐるのであります。この人は今出向いて行つた事の爲に、何か氣に鬱屈があつて斯うしてゐるのかと思へば、さうではなくて、この小型の蒸汽船の

模型とそれを見ながら、幾つも幾つも線と劃を引張ることに一心不亂であるものらしく見えます。それに漸く打ち込んで行くと、急に洋式の算術らしいことを始め、次に日本の算盤を取つて幾度か計算を試み、それから細長い形の黒い玉を取つては秤臺の上へ載せ、それを幾つも幾つも繰返して其の度毎に目方を記入してゐるやうでありました。

この時分、夜は漸く更けて行つて水車の萬力の音もやんでしまひ、空は大へんに曇つて雨か風かと氣遣はれるやうな氣候になつて來たことも、内にあつて一心に是れ等の計算に耽つてゐる駒井甚三郎には一向感じが無いらしくありました。

風が出たなと思つた時分に、駒井甚三郎は不圖戸の外を叩く物の音のある事に氣が着きました。

宇津木兵馬がまた訪ねて來たなと思つて甚三郎は立つて戸を開けにかゝりました。けれども其れは宇津木兵馬ではなくて見馴れぬ勞働者風の男でありましたから、

『誰じや』

甚三郎は拳銃をさぐつて用心しました。

『拙者だ、南條だ』

駒井甚三郎は、その一言で了解する事が出來ました。

程なく駒井甚三郎と南條なにがしといふ奇異なる勞働者と二人は前の室内で椅子によつて對座する事となりました。

その以前には、矢張、不意に此の男が甲府の駒井能登守の邸を夜中に驚かした事がありました。その時は其れと知らずして驚かしたものでありました。今は其れと知つて訪ねて來たものらしい事であります。

能登守の風采も其の時とは變つてゐるが、南條の風采もやゝ變つてゐます。

『何をしてゐた』

と駒井甚三郎が尋ねました。

『此處の工事の人足を働いてゐる』

南條が答へます。

『それとは知らなかつた』

『此方も知らなかつた』

『如何して拙者が此處にゐる事がわかつたか』

『宇津木兵馬から聞いた』

『成程――』